



建德草譜
卷之六
五六



後慈草諸抄大成卷之五目錄

七 羽夕ハシをシそシなシくシまシれシぬシるシのシ後

八 名ナ利リのリ後

九 法ホウ苑エン上シヤウ人ニンのニ念ネン佛ブツのノ事コト心シンみミのノ後

十 栗クリとトらラいイのノ女メのノ後

十一 加カ茂モのノ競ケイ馬バのノ後

十二 幻キヤク雅カ偽ゴ知チのノ奇キ病ビヤウのノ後

十三 去キ八ハチ第ダイのノ文モン人ニンのノ男オトコのノ後

十四 月ツキ夜ヤ小コ笛フエ吹フキのノ男オトコのノ後

四十五 良愛僧心版わう版

四十六 強盜法中版

四十七 くさめく版

四十八 光親の最勝禪の事ゆり版

四十九 老来りて地事道とゆせん心覚ゆる事なり

の版付 福林拾因の事 并 心戒聖の事

げふくく

●ゲニクト
ニツ重子

七

朝夕へあてなかくあれ

名心ハ佛經ノ中ニ善哉々々ト
アルハホメタルトノタシカナル時ニ
古文眞寶ニ蒼蠅々々ト凡ハ蠅ヲ
惡ムトノツヨキナレバゲクモ是ニ
ナラヘシルベシ 参

人乃ともある時ふ 家よんを

とん人れ

●論語子曰晏平
仲善與人交久
而敬之 禮記云賢者狎敬是 說

さしはくろつるさ海よゆ

朝夕へふゆあくひちとさうめいさ意度かゆくんゆらいつと云へれ

どあはげふくく 名よ死人の朝とそが

はゆ

●朝夕ト云ヨリヲホユルニテ此段兩節ニ分ツ ●山案此段ニ
上段ヲウケテ平生ノ心入ヲ書リ上段ハ臨テキ中モ心ナ
ラズ久シク音信ナキコトヲ云此段ハ又朝夕ナル中ニモ礼ヲ盡スベキ時アルヲ云

第一節

ラズ久シク音信ナキコトヲ云此段ハ又朝夕ナル中ニモ礼ヲ盡スベキ時アルヲ云

うらやけうらやけ

云礼勝則雖樂勝則流
又云張而不弛文武不能也地
而不張文武不為也

うらやけうらやけ
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より
かんと書て向氏文集より

第二節

一段之統論

此段男女朋友トモニ親レキ上ニモ礼義ヲ失ハス
又ウトキ中ニモ和ヲ貴ベシトノ心ナリ畢竟親
此段ハ論語ニ有子曰礼之用和為貴先
王之道斯為美小大由之有所不行知和而和
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交
此段朋友ノ交未ニ六敬表ルニ依テ必絶交

名利は法うられぬ

而好名利者也
名利大毒惱二世之身心
以心為戒
衡ト帝結

名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ

来辭ニイヘルガトシ
云終身後々而不見其成功
南子原道訓云聖人
善薩呵色欲法云凡
為之僕
以驅役為義能驅役
行者心神
濼轉三取故盤

名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ
名利は法うられぬ

志のうらやけ

志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ

其成功不亡以待
順乎造物乃為外物
日行盡如駛而莫之
能止

志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ
志のうらやけ

第一節

名利ト云ヨリ愚ナレニ
此文段是ニ同ジ
是兼好一生ノ本意ノ閑寂ヲ本ト

シテ言リ即此一段ノ大意ナリ文●山案一段ノ大綱ヲ釋テ名利ノアレキヲ論ビテ
此大ヨリ名ト利トヲ分ケテ逐ニ云顯ス

財をなすべし

宗誦懷詩曰膏火自煎熱
財爲患害遺教經曰不知
足者愈富而貧

害

文選曰不
害不誘表以招累

媒

山案字彙曰諷林切音
枚媒約媒之爲言謀也
謀合二姓也文中子曰儀
之媒也

乃の好

白氏文集
五十一身
後堆金檢此手不如生前
樽酒唐書秦主引尉遲敬
德爲右府參軍屢立大功
天子嘗以書招之贈金四

財をなすべし

財をなすべし 利小此
りく失欲ふ之をけははるか
小にしてはるく大欲とい
盤

媒をなすべし

媒をなすべし 文選曰不
又惑のまれの道にそ
又ちり小ぬふと中
財のハミと深惑とと
とより文

死後小誰ともんき

死後小誰ともんき 死後
又ハそれととりたり人
又ハそれととりたり人
又ハそれととりたり人
又ハそれととりたり人

死後小誰ともんき

死後小誰ともんき 死後
又ハそれととりたり人
又ハそれととりたり人
又ハそれととりたり人

小

史記天官書北斗
星云通古木森屬
星經卷上曰北斗星謂之七
政天之諸侯亦爲帝車
ノ北斗ハ七星ニシテ人ノ目ニ
カハル星ニハ是ヲテ金ノヲ
重子ルニトスリ

人

李卓吾集十八日若是不肖
之子父母方死膏頭味冷
楚財產出賣田園之意飲

同

文選序
曰辭職
不問俱爲祝自之說
君子得其道樂小人得其欲

財をなすべし

財をなすべし 財をなすべし

わらふの車
史記ニ
ハ母為

ノ字薄愛ノ字ヲアキキテトヨ
介日本紀六無為トナリ 参
無道ト書ナリ道ヘカストエ
交ナリ 右ヨカラスト云コトナリ 素交鳥尊ノ愚行
ノトキ諸神アキキナシト云給フ詞ナリ 諸

大から車肥る馬

ヒ合セ書タルト見ヘタリ
馬衣輕裘揚々過閭里雖得市童憐選為
識者歸句 此句暗似弘法
之語意三教指歸曰者輕肥
流水則電幻之歎忽起覺明
註曰論語曰赤之適齊也乘
肥馬衣輕裘後漢書曰車如
流水兼名云輅駟一名流水 参

金ハ心小とて

天地篇藏金於山藏珠於淵
不利貸財不近貴富不樂書
不哀天不愛通不醜窮壽
文選東都賦曰捐金於山沉
珠於淵 同第三藏金於山
抵璧於谷 注 抵側擊也 参

第二節

クルヒル一ノ愚ナルコトライヘリ文
ルキニ愚人ハ利ニトテテ無益ノ金玉ヲモトルコトハ至テ愚ナルコトナリトイヒシメタリ

うはなれぬ名

文集ニ遺文三十軸軸々金
玉聲龍門原上土埋骨不理
名野 本朝文粹卷十高積
善曰夫欣者百年之旅館也名者
萬代之嘉賓也 柿本人麿石
見園高津浦三ノ石見浮高津浦
禾閉リ浮世自ラ見果ケル哉ト詠給テ

わらふの車。大から車
肥る馬。金玉のかざりし

肥る馬。金玉のかざりし
肥る馬。金玉のかざりし
肥る馬。金玉のかざりし

もろわん人々うらして
魚ありとをそえん久う金ハ

金ハ心小とて。玉を削るかく
財とくむらむらとて。金ハ心小とて

金玉のわりとつとと。又二つに分る文章面白
首書有

うはなれぬ名と那うは
うはなれぬ名と那うは
うはなれぬ名と那うは

財多ケレハヨリ愚ナル人ナリトテ
利ノ益ナク害アルコトヲ書ツラ子テ是ニツカハレテ一生ヲ
山案人タル者ハ分限ニ應ジテ財宝ヲタクハ置テハサモ
山案は次ハ節ノ智恵とんと勝まうら名は次
名は次ハ節ノ智恵とんと勝まうら名は次

うはなれぬ名と那うは
うはなれぬ名と那うは
うはなれぬ名と那うは

名は次ハ節ノ智恵とんと勝まうら名は次
名は次ハ節ノ智恵とんと勝まうら名は次
名は次ハ節ノ智恵とんと勝まうら名は次

終り玉へり人今以高津ノ浦ニ書
付アルヨシ近世細川玄高津ノ浦
ニシテ見玉ヘリ移リユク世々八經
スド朽モセヌ名コソ高津ノ松ノ言
ノ葉▲又藤原實方ハ流罪ノ
身ニテ奥勤ノ行キ玉ヘ其罪ノハ
人云シテ其人ノ歌道ニ連シ玉ヘ若
ク今也モ云傳フ西行貞州後行
ノ時實方ノ墓ヲ見テ朽モセ
ヌ其名ガカリヲトメテ枯野薄
秋見ト見ル是皆名ノ朽スニテ
ユルニナリ説

家小うまれ

俗官モ僧
官モ首ハ

其徳ヲ見テエラ行レ故ニ元亨
紀書ノ中ヲ見侍ル異國ニ金銀
ノ飾ヲ取テ官職ヲ給ル事アリト
イトモ本朝ハソレカハリテ德行ヲ
見テ引アケラルヘク虎関モユ
シテ記サレヌハ此時代ニテモ我國ノ
道ノトロガルニヤ参

賢人聖人

孟子萬
章下篇

曰參貪者辭尊居卑辭富居
貧辭尊居卑辭富居貧惡平
宜手抱關擊柝孔子嘗為季
夏矣為乘田矣野六家文選
四十三與山巨源絶交書柝
叔夜作云老子莊周吾之師
也親居賤職柳下惠東方朔
達人也安乎卑位吾豈敢短
之哉参 山案自ラ賤ニキ位ニカ
ル者古来ニ多シ葉父許由行實
文今類ニナリ

時小あわび

心明

宝鑑曰擊壤詩曰 富貴如將
智カ未仲尼年少合封侯世
人不解青天意空使身心半
夜愁 参

と云こりてとてうのれぬ名とよかりとて
あふもこのあふと次のあふもよなり

世小あわびんこそあわびり

るるあわび 位たたく厚ん

是は名は好む 位は人の名はすなり 盤
利と好むもやういふ人へは且且好
も名と好むも人の名と好むも又と好む
して是より好むも名と好むも又と好む
かくおもふ利もつらつらと好むも
あふもよなり 参

とれささしとさされる

人ともいふべき 愚よ拙

人をも家より生まれ時よあ

是より勝 文徳の蔭小しあふ背 且時乃仕合
う人とい の子孫も官位よのわらふよあふも 参
くれまき わり背官とさぬよ賢才と用ひ世
み細とこハ 家よあふと御とん是と世官と
かかり 参 首書有

魚はささき位小乃かり

驕ときいじるもあわりい

とるる賢人聖人

とらあしき位り

自とつ御眼子人のあふ小奉用さう致とつあは
らぬのあふもより用見とそれと辞位もあ
下位なりとてささき小あわびと 盤

時小あわびとわらわら又あは

あふもい賢のあわりとも不事あして時よあてぬ人
あふもい賢も孔子も時よあてぬ人も同じ 参

首書有

首書有

首書有

首書有

次よ思こ

山案司馬溫公諫院題名

記曰彼汲汲於名者猶汲汲於利也其間相去何遠哉トリ許昌斷裁之モ士ニ曰ク爾ヲ論テ道德ニ志ス者ヲ上ト功名ニ志ス者ヲ中ト富貴ニ志ス者ヲ下トシテ鄙夫ナリトイヘリ又君子疾没世而名不稱焉ト聖人ノ宣タル向上ノ道理有レシ慕好ガ知所ニアラス

第三節

ナルコトライヘリカリ榮利ヲ貪ルノ至リテ愚ナルニクアラバ各譽ヲモトムルハ猶賢人ノ業ナル故レバラク揚テイヘリ文利欲ノコトバカリニ見テハ理又各ト云次ニ續キ難シ右ニ云フ通りニ名ノ爲メニ官位ヲ求ルモ愚ナリトイヘシト見ルヘシ

智恵

山案字彙曰智知意切音置心有知也荀子曰是之非之謂之智

雲峯胡氏曰智則心之神明所以妙衆理而宰萬物者也智二種々智アリ義理ヲ以テ得ル智ハ識智トモ又分別智トモ云リ字問ノオ智之佛ノ智聖人ノ智ハトスヘキ沙汰ナキナリ全慧山案字彙曰胡挂切音惠性通解也

人の世と

論語類淵篇曰

夫間也者色取仁而行遷居之不疑在邦必聞在家必聞▲莊子逍遙遊曰舉世而譽之而不加勸舉世而非之不加沮定乎内外之分辨乎榮辱之境文中子卷八魏相篇曰文中子曰聞謗而怒者諛之由也見譽而喜者佞之媒也既遠註曰為謗譽所動則謬得ト云

かひらる人々人々

一ひらる人々もさきほくの位とのぞむも次おたるあつ。もさ友後代のと次おとさ字はか利とひら分じ利欲小同一一とよひはれはれでいさ位置とひひあつるのるをさしひらあつたり●首書有衆人も世小名と察せんぬ下使とし先てさ位あるとのとひるるゑとて世富栄の商人少稜とさ士気う心あ思ひて士の志似とらりあつは是利のゑとてかて名のためひら山案

ウツモレ又各ト云ヨリ次ニ愚ナリニテナリ●第三節ハ高キ官位ヲ望ムモ富貴トテ利欲ノ類ナレハ是ヲ望ム愚ナリテ愚ナルニクアラバ各譽ヲモトムルハ猶賢人ノ業ナル故レバラク揚テイヘリ文山案此説ハ高官ヲ望ムヲ利欲ノコトト三見ルナリ但云次ニ續キ難シ右ニ云フ通りニ名ノ爲メニ官位ヲ求ルモ愚ナリトイヘシト見ルヘシと云フは佛書オハ解義智ト云

たる譽も残さすかーき成はく思ひまる世は_{トモ}賢人のの志とつへー文_{トモ}賢人のの志とつへー文

愛するは人の世とさるふまがりかひらる人々人々世よとゆらん人々又いとゆるふ上お又このふちりて愛小い又こいさる

カシコキモ賢カラヌモ鳥辺野
烟ノ色ハカワラサリナリ東坡詩
ニ仲尼盗跖一塵埃トイフ説

春ハモシ
韓退之
送李愿

序曰與其善於前孰若無毀
於其後 善 莊子盜跖篇曰
好面善人者亦好背而毀之
▲法華釋曰不向張說趙長恐
彼謂以他之長而譏我短亦
不向張說趙短恐彼謂爾既
背毀於彼豈能背毀於我也善惡
俱不可談者也 ▲サレ佛ハ利義毀
譽林議苦樂ノ風吹トモソレニ
ウゴキモヌ一四方ノ風須弥ヲ吹カ
コトトカヤ維摩經ノ擊公ノ跪ニ
モ侍ルナレ 參

弟の好れ名残り

晋書張翰曰使我有身後名不
如即時一盃酒 ▲通鑑魏主勸
選舉勿取有名者如畫地作餅不
可破也 野 列子楊朱篇曰賢愚皆
醜成敗是非無不消滅但遲速之
間爾 張湛注曰以遲速而致感奪觀而感
豈不鄙哉 矜一時之毀譽以焦苦其
神歎要死後數百年中餘名豈足
潤枯骨何生樂哉 腐齋口義曰雖有
一時之名譽數百年之後無不消滅焉
善者亦徒自費而已 參

第四節

あわく智と
山案致
知格物

八儒者ノ第一トスル所ナル故三人度
ニテ知フ已ハ百々ニ人ナクモ己
子度ニテモ其理ヲ知レトイフサレト
兼好意ハ智ヲモテガ父只待一モノク徒
然トシテ暮スバカリナリ此老子ノ意

去へー 誰とらんらたまふ
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

弟の好れ名残り
あらんららんららん
やあらんららんららん

也無功無若皆言無迹也。焦辨
園註曰至人知道內冥諸心而後
絕無寄故曰無已神人盡道成遂
萬物而始用深藏故曰無功聖人
忘道神化游々了不可測故曰無
名。●碧巖第一達磨初見武帝
帝問朕起寺度僧有何功德磨
曰無功德。增錄

かゝり

●大惠書云無見無
聖無得無失。參

第六節

ナケレバ又態ト徳ヲカクシ愚ラニモラントスルニモアラズ一向賢愚得失ニカハラヌ一ライヒニ
兼好本意ノツレクニ落着セリ文
●真ノ人ハ自徳ナラズハ知リ難キト云フ一ノ第一節ニ交レタリ全
●名利ノ要ヲ求ルトハ名利ヲ要シ
ト云テ下ノ句ニ非以要名者吾也
アリ要ノ字ニ假名付タルヲ會
アマリ来レルナリ。●又一説
●名利ノ要ヲ求ルトハ名利ヲ要シ

名利の要

●莊子盜跖篇
ニ興名就利

故の公

●此第六節ハ真ノ人ハモトヨリ智徳功名ヲ求ル心モ
●ツタヘテキクト云ヨリヲラサレバナリニテナリ
●此第六節ハ真ノ人ハモトヨリ智徳功名ヲ求ル心モ
●真ノ人ハ自徳ナラズハ知リ難キト云フ一ノ第一節ニ交レタリ全
●の要の二字ハ行々ナリ又一説ハ用ハ
て兼記ととせらるる。首書有

テ求ル也。●又一説。●老子經ノ註ニ
欲者要也ト字註アレバ名利ノ欲
ヲ求ルト云フコトニヤ。●

あるの皆非あり

●杜子美
詩ニ興

息人間萬事非。●新撰朗詠
●秋夜 長國詩曰萬事皆非
灯下淚一在。●半暮月前情

菩提本非樹明鏡亦非臺本末
無一物何處是心塵埃

第七節

●一ヨイノ心ト云ヨリ終テテナリ。●是一段ノ結文ナリ
●此ヨヒト云ヨリ終テテ真ノ人ハ智徳功名ナキト云所ノ
ツギキニ非ズ發端ノ名利ニツカハレテ一生クルシムト云所ヨリ未此終テテノ結句ナリ多ク心
付テ味フベシトヨヒラ至トシテ名利ニラケル者ハ万事皆非ナリトイフ一ナリ此カクゴトト云フ
真ノ人ハ智徳功名ナキト云取ニカ、ルヤウニ聞ヘテミソコナヒアルナリ。●名利トモニカギラス
世間ノ事ハ萬事皆相ニ云ニタラス子ガフニ不足サテ何ヲ云子ガハント云ノコレテ下段ニテ佛道ノ
一ヲ云テ佛道ヲ子ガフベシト心ヲアミテニラセタリ。●

あるの皆非あり

一段之統論

●此段ハ世ニ愚ナル者ハ利欲ニヨヒサレ心アルモノハ又名聞ニヨヒテ一
生ヲクルシムル一ライヒサメタリ畢竟人間ノ一生ワツカナル一ナレバ浮

世ノ榮利ヲ貪ラス名譽ヲモ求メズシテツレト身ヲ閑ニシ賢愚得失ノ境ヲ分レテアラスト
心ナルレ例ノ兼好ノ人ニ異ニ筆法ニサテ此段利欲ヲイサハルトコロニ身ノ後ニ金ヲシテ北キヲサ
庄ト云ヒ各聞ヲ戒ル所ニホムル人ソレル人トモニ世ニトミラス身ノ後ノ名ノコリテ更ニ益ナシトスリ畢境
無常ノ世ナレバ萬事皆非ト云ニ帰セル誠ニ心ヲツクシ文ノ兼好ノ老莊ヲ好ル段ワキテ此章ニ
アリ心ヲツクベシ又ツレノ本意ヲノベタリ参●加様ニカ、レタルヲ聞ケハ儒道ヨリ入キ
アガリテキユ日本へ道家ノ書アミタワタリタレドモヨミテ感ズル人ノミニテ加様ニ身ニ行ヒル
道人ハ此兼好法師古今ニ独歩セルモノナラシ

或人 山案文選六臣註兩都賦 序註呂向曰或者不定 或人 法苑上人 念佛の付

之辭トアレドモ今コ、ニ書ル或
人ハ依々貴高綱ナルベシ百和
論語ヲ讀ケルニ彼書ニ曰佐々貴
四節高綱道世シテ高野山者
シガ或時京へホリテ源空上人ニ逢テ問ヒケル
念佛ノ時子フリニカサレテ行ヲ念リ侍ル
一イカシテ此障ヲヤメナシヤト尋レカバ上人曰目ノサメタラニホト念佛シタニトゾ申サレシ

法苑 元亨釋書第五慧解篇曰釋源空姓漆間氏美作國編岡人也父時國母秦氏父母無子新
通受台教又從黑谷馨空稟密乘及大乘律凡大藏經律論他宗章疏靡不換閱晚見源
信徒生要集乃棄所業僞淨土專念之宗 又建和二年 寶鏡元 建曆元年 詔追

都城二年正月居大谷漆疾其徒安除隱像於床頭且為助標云二十五日高僧
号諸徒助和午時著傳持之慈覺僧伽梨頭北面西誦光明遍照偈而寂年八十臘六十六
法然ハト敷山ノ僧ニテ因頓成一流ヲ相承セル人之後ニ敷山ノ内黒谷ト云所ニ引ヨリテ念佛徒
生ヲ修行セラレタリ其跡トテ今ニ敷山ニ在其後月輪關白嵯峨ノ二尊院ヲ建シセラレヨリ彼寺
ノ開山トナラレタリ二尊院ハ今ニ天台宗ニテ敷山ノ末寺ニ此故ニ法然ノ全骨ヲオサメタル塚彼寺ニア
リ灰ハアラノ光明寺ニアリトナシ

元國 美作國久米押領使 盛行 重俊 國弘 時國 人押領使漆間時國

源空 其後十八歳ノ時同西黒谷ノ慈眼房ノ敷空ノ弟子トナル故ニ兩師ノ名ノ上下ヲ取テ源空ト号
童名勢至丸生質性敏也十五歳久安三年春ニ比叡山西塔ノ北谷持室坊源光ガ弟子トナル
書言故事曰僧曰上人有過能自改名上人内有智德外有勝行在之上名上人

人 山案摩訶般若經曰何名上人 佛言若菩薩一心行阿耨菩提心不散亂是名上人

念佛 元亨釈書二十九日念佛者持誦之文也修多羅中持于佛佛此方局弥陀焉或釋迦焉
山案智度論曰但一称南無佛是人亦得畢苦其福無盡 念佛ノコトハモト法華經

ノ中ニ但一心念佛トモ以深心念佛トモ見ヘタリ弥陀念佛ニ四種ノ品アリ一ニ翁名念佛ニハ
觀像念佛三ニ觀想念佛四ニ實相念佛ナリ法然坊下機ニ教ラレシ念佛ト云ハ翁名念佛ナリ

此故ニ念ノ字ヲ翁ノ義ニ心得ルナリ此故ニ一牧起請ニモ觀念ノ念ニモアラストイヒ念念ヲサトリ
テ申念佛ニモアラストイヘリサレトモ觀經ニ念佛トアルハ觀念ノコトニレテ唱ルコトニアラズ故ニ經文曰

此人若通不違念佛善友告言汝若不能念者應称無量壽佛トアリ是翁ト念トニツナリ法
然房ノ内意ハ下根ノ衆生ヲ導カシメ念佛ナレバトガムベキヤウナレ

然房ノ内意ハ下根ノ衆生ヲ導カシメ念佛ナレバトガムベキヤウナレ

然房ノ内意ハ下根ノ衆生ヲ導カシメ念佛ナレバトガムベキヤウナレ

然房ノ内意ハ下根ノ衆生ヲ導カシメ念佛ナレバトガムベキヤウナレ

又疑ふ... 問答科節第八信疑下日問若

問答科節第八信疑下日問若... 全不信不修... 疑佛智ヲ疑ト云ヲ列ハ其文章ノ

問前ノ一定不定ノ義... 不定トウカハハ性生トラスト疑シタ

一段之統論... 此段ハ前段ニシテト人ノ賢愚得失ニカハラズ

何の入り... 心ナリ何ノ入道ト云テ疑各ヲ

身ハもと云行よか... 兼好の判行参

さうも是もたふ... 念佛とれば... 念仏とれば... 兼好の判

性生とともいされけり

乞も又ふふと

用情國小何の入道とるや

入るの志もね... 兼好の判

後述本傳

コトハタメニヒクナ世ノ中

源氏東

屋ニイ

チゴロニイヒワタリケリ上在

粟とのこり

町ニ在

厄アリ常ニ大豆ヲ食テ更ニ
ヲクハズ人ノ所ヘ行ハ豆腐ヲ
煮テクハセケリ人皆豆腐ヲ
去ケル又伊豆國三嶋ニ或人
アリ五穀ヲクハズ只粟ヲノミ
食ケルガコレハ或人ニ嫁シケルト
ナレ野 ●山案ヲモ亦ノアタリ
見タル之或者ノ娘五穀ヲ不食
シテ尺楯ヲノミクヒケルガ
モ静白ニシテ常ニ煩フコト
リ是皆五穀ノ偏ニヨツテア
ルニコレモ藤ノウキナルベシ
ホドナク早世シケルナリ

米のぬい

廣韻曰穀
實也五穀

米 大麥 小麥 大豆 小豆
又云 稗 菽 粟 麥 稻 古

一段之統論

此段入道ノ嫁ラユルサハルニツケテ慶貶ノ兩説アリ ▲先ホメレ
説六 ●此女外ノキコエト其身ノ振舞トカタ、ガヒノ侍レハ嫁ス

ルハ各ニヨリテ人ノモテハヤスヲタトヒ此實事ヲ語ルトモ一堅ハ執著深キ男アリテ絶
ニメテ先カエルトモアルベシ然氏其形衰へ寵愛モ盡テハ彼實事ノ異様ノ事ニカレテ
終ニ一生ヲスリトラクルニシケレハヨシカ様ノカタモノ人ノ累ルニシテハ非ズ果ハ先祖ノ名
ヲモクダスコトモヤアソシク嫁セヌガサレハハシカスト思ヒケルニヤ人トシテハ虚名ニメテ、其
實事ヲ披ルナカレトスヘテ儒生淑門其外諸人ノ一ニシテセル親心眞實ナルヲ書置ケル
ナルハ是又莊列ノ虚名無實ヲ惡メル心ニモ通ズキニヤ ●ルソ仕官ヲ望ミ未嫁
或ハ心ノ僻メル汝取ノ見惡キアレドモ他人ヲ頼ミ様ニ依リ終其身ノ耻ヲ求メテ者
世舉テ皆然リシカルヲ尋常ニ替リタル取アリトテ嫁ラユルサハ入道心尤至極セリ ●是
●衆門ノ上ヨリイハツラカラヌ身ヲモ退ク本意ナルベキニシテ已ニ虚名取アツテ強テ世
ニ交ラント来ルハ耻ナリ此入道ノ心ナシクニハアラヌヲ感シテ人ニカミシセシメニ爲ニ書載タル
ト覺ヘ侍ル ●又説シ説六 ●是ハヨキ娘ヲ異様ナルアリトテ縁ニツケザル親心ヲホメテ書
ルト思フ人アリサハ非ズ親ノ智恵ナクシテアタラ娘ヲカクシ置ク事ヲソレリテ書リ兼
好ハ親心ヲヨレトモアレトモ是非ヲツケヌニ何ヲ以テ批判スルト云人有ベシコレハ前段ノ法
然上人ノ金言ヲホメテ其次ニツキトモナキヲ書テセルニテサトラレベシ親ノアヤマリヲシラセ

もあつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ
はくもあつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

あつたけりいせりい娘も身病かりもふくさ

シタメニカタキヨキ娘ノヨレサハカレ侍ル貞 ●此説ニカルカラスル此草子ハ異國ノ隨筆及
ビ筆談ノ躰ニ似タル文法ナレバ工筆ツヨクテ各別ニ見ルガヨキナリサレドモタメニハ前
後ノ段ニモ其心ツキタルトコモアリ ●又一説 ●此段ノ心説々アリ一ツハ此段ノ行雅僧都
ノ辭病ノ段ト同ジクメツラカナル解アル女ノ物語ヲ書リ文 ●山案此説モスナラニテヨシ
但シ句解ニハサラニ婦人ノ怪異ヲ取テシルスノニハアラジトイヘリ右ノ説々後生好ム所ニ
シタガフベシ但シ強テ論セハ論語ニ人遠キ慮ナキトキハ必近キ憂アリト云心ヲ以テ見ル
レ被入道ガ娘ヲ人ニ嫁スルニ實事ヲ以テスルトモ後ニハウトレント遠慮ヲレユサリ
レ故ニ近キ憂ナカリレトナリ又人トシテハ其子ノ惡シキヲレラヌガ世間ノ人情ナルニ彼
入道ガ子ノ惡シキ病アルヲ能知ツテユサヌハヨキ志哉トホメテ書ケルト落居スベシ

加茂の競馬

昔ハ内裏



又月又日加茂の競馬

●好入のよりの

首書有

競馬と書居る馬

ノ豊樂院ニ今日騎射有左
進ノ馬場ノ真手番十トアリテ年
中行事歌合公事根源等ニ見ル
又五月吾節五位以上進走馬ヨシ
延喜式兵部式ニアリ中比ヨリ此
事細テ今ハ只加茂ニ其義或取
コレト名文 ●山案袖中抄曰
五月三日ハ左近荒手結也四
ハ右近荒手結ナリ五月ハ左近

と足ゆりに車の前
●好入のよりの
首書有
●好入のよりの
●好入のよりの
●好入のよりの

ノ真手結ニ六月ハ右近ノ真手
結ナリ荒手結ノ日ハイテノ近衛合
人水干ハカニニクリアゲテ裾
ノ尻ヲ女ノ中ニヒタルヲ引出テ
其上ニカバキヲ結ニ真手番ノ日
ハ紅ノ下ノハカニオリ物ノサレキ
ニクノリラアゲズバハサニテ
裾ノ尻ヲ勝ヨリ前サニ引タ
ヲリテ前ニハサメリサレハ此真
手番ノ日ヲヒオリノ日トイフ ●公事根源同
覽四府馮謝丙辰五御親親王以下五位所貢競馳馬戊午五御同殿令四衛府馳盡種々
馬藝及打遠也同六年五月し卯是端五之節也天皇御武德殿視馳射

わいもなうりか
ひらひか
法師の
よはい

雑人

●葵卷ニ雑々ノ人ト
アルト同シ下々ノ者

地

●字彙曰塚塚也 ●玉篇
曰封道曰塚 ●悦目抄ニ

あから

●拾芥曰證類本草
曰五月五日俗人

法師の
よはい

●五月五日俗人

取擣葉佩之遊惡氣▲枕草子ニ云木ノサマゾニクセシドアチノ花イトオカレカレバナニコトニテテカナラズ五月五月ニアフモオカト云文・新古今ニ・紫ノ雲ノ林ヲ来テ見レバ法ニアラチノ花咲ニケリ・山案ニ説爰ニムカヒナルアフチノ木トイハハ擣木ノ事ニハ非スアフチトハ大路ノコトシ只何木ニテモ道ノホトリニハヘシ木ノコトシ擣木トハカリ限リ見ルヘカラス廣ク見ルヘシ此説又奇ナリ

あれもの

●源氏帝木ニシモノ物語セシ
▲花鳥ニシレモノトハガレモノト云フガトシ五音相通ナリ ●葉第九詠浦嶋子歌ニ西開之愚人之吾妹兒亦カナル義ナリ ●左傳晋悼公用子

有兄無患不辨菽麥故不可立杜預曰菽大豆豆麥殊形易別故以為癡者之候不慮蓋世所謂白癡也 ●本朝文粹六白痴ト書

悪かき事ハ

●此所鳥窠禪師ノ故事思ヒ合見ルニ五灯會元曰鳥窠道林禪師木郡富陽人秦望山有長枝枝葉繁茂盤屈如蓋遂擇止其上故時人謂之鳥窠禪師元和中自居侍即入山謁師問曰禪師住處甚危險師曰大守危險猶甚白曰弟子住鎮江山何險之有師曰薪火相交識性不停得不險乎句

決きあういこう福ありて

疾の字或い甚の字

あぬき時小目とさぬい
と度くありそと入る人あ

ざり何さそて世のあれもの

●あはれもの思ふこと
●あはれもの思ふこと
●あはれもの思ふこと

れかくあやうさ枝のうへ

そやもれ公もそ福あり

らんもそいふ小家公よ物と

もいへんわふりまき

生死の到来只今ふりわ

常ハ生と死との二つと生死とのほど爰ニ生と死との
名の死とのと小義より只死の一字の義ニ句 ●生乃
まよきと心とけくぐりて候れは死とせく生
死とけり只死とのれ候れは死とせく生

何んそれと忘れて物見

て目とくくああるさハ

れ肉さるる物とそり

まばあなる人ども肉もふ

さ小丁もゆられ 老悪

ひとひく皆ほと入んえ

人本るよ

文選 兼照

詩人非木石豈無感句・遊仙 寓云心非木石豈忘深恩

白氏文集曰人非木石皆有情 不知不遇傾城色 伊勢物 語ニムカレヲトコアリケリ女ヲ

トカク云事日月テケリ岩木ニ

レアラフ子バ心グルレクヤヲモヒケ

野・東屋ニ岩木ナラ子バボシ

おの感はる事

人ハ木石ノ如ク無情ノモノニ非ルニヨツテ教人ナケレバ心鏡イツ迄モ自レリ誠ニヨツテ教フニ自得 息心感じウケムハ必然ノ理ニ 故カク云一ハ人ト云モノ教ヘラレニキニアラス時ヲハカリテスハ教

他ナルヘキヨレナリ佛一代ノ説法モ時至ラ子バナラガレニヨリテ花嚴阿舎方等般若法花ノ五時アリ孔子モ時ニアストテ仁義礼智信ノ道ノルニテ大成ノ聖人トモトモ時イタラヌユニ二道行レズレテ書ヲオサメテ後世ニ道ヲ残シ玉ヘリカニル理ヲ競馬ノノリテ人ニラセタルナリ 盤

一段之統論

此段無常ヲスルナリ 生死到來只今ニモヤア是ヲ忘ルベカラズトノ心ナリ人使名利ニツカハレテ開ナル假ナキモ此無常ヲ忘ル、故ナリ興ニモムサボルトクヤニサレハ命ヲ終ル大事コニ来レリトタニカニレラカレバナリト書リコレヲ兼好ノ為人ノ所ナルベシ文・此段モ前段ノ意ノゴトク彼法師ノ本ノエヨリ落ヘキカト未ノ慮モナク子ムレルハ愚ナル至リナリト云テ其ヨリ無常ノ心ヲ引ウケテ人ニ示レ結句ニ至テ人スル者ノ性ハ善ナルコトハリヲ述タリ儼ニ有難キ段ナリ 盤

唐栲中ねの雅傳

村上天皇

仁皇六代 具平親王 中務卿後中書王

唐栲中ねの雅傳

小の雅傳

我らつちと 善好とよび入るとも 見おの人の意 ありて 盤

とらりつちとよび入りつちと

つちとよび入りつちと

らざらんあれどもわらうの

見おの人の胸なり 参 評 盤

してよの奇跡なることいふと 評 盤

盤

いふこといふこといふこと 全 人の心をいふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

師房 從一位 頭房 從位右大臣 中院

雅實 久我從位 大政大臣 雅定 右大臣 中院

雅通 內大臣 俊久我 通資 唐橋大納言

雅清 參議 正三位 行雅 僧都

氣の上 源氏若菜ノ下 ニケノホリ又ル

ニヤ野 柳卷ニ御氣アガリテ 猶ナヤニシウセサセ玉フトアリ

二乃舞代面 世継ニイハクニ コトニ今ノ世ノ

事トリツテノ玉ハセヨアハレトセニナリ玉ヒ又ラントイハバニノ 舞ノ翁ニテコソ侍ラメイハカガレモシカリ侍レニノ舞ノ翁モム子ヒノキナトス 狭衣ニ云カキカハサルバチ音モシロウ愛敬ツキテ

雲井ハルカニヒギノボル心地ルヲカクレミノ、中納言ノテニ 舞ニヤナラントハツカシケレババチツイサレ玉ヘルヲ人々モ宮モアカスヲボシメレケリ

鼻小 莊子ノ 聞世交

會撮指矣五管在二兩解為骨 昔曰會撮也五管五臟之胸也 又大宋師篇ニイハル子輿ガ病モカクムトシ又唐ノ悟達國師ニ面 瘡アリ一編年通論佛祖統記勸善書等ニアリ又人アリ時ニ面瘡ヲ生ジテ酒食ヲ瘡ノ口ヨリクハシム貝母ヲムセテ愈スト 西陽雜俎ニ見ヘタリ其外尋病ア、夕野槌ニ出タリ

坊の内 名義集曰或名 僧坊者別屋

志云宗小師稀聖教と云ふと教相と一りゆと云ふ事と事相とん 野

今乃師を僧ありと云ふ 氣の上を病ありて云ふれや

うくぬく心弱小鼻の中 息も出ざらん

けきどがくくぬく眉額 息も出ざらん

かども腫ぬどひく赤か 目のうらよおひ

ゆひ多れむ物も見るは二乃 舞の面れやうふらんけ

らぐあもそろく鬼の影よ ならて目、項のうらふつさ

顔の病鼻にありかどして後 坊の内の人よも見ては

らら居るも久しきら てるるくく死よ

上はかゝると云ふよらりて爰はれと事り古

又とくらひらけく見わさるるの影か人なり
いさりの灯の下ふえぬ代の人とよふは相懸るるから也
らん尋ね祢こりぬけ

一段之統論

此段優ナルサノ物語ヲ古詩ナドノ面影ニテ書リ師説ニ誰人ノ如様
ニゾクベキモシラザルナレバ平生ノ作跡ヲタシナムベキ一之儼ヤガ
テカケユモラミシカバ口惜カラマシトイヘル段心ニラナジカルベシ也
此段春ノ花ノ比年ニテハ
リナル人学文シテ居る事ヲ兼好感シテ人ノ教ニ書ルニ其故ハ若キ者ノナラヒトシテ心モ
ニ動キ人ニサソハレ花ニメテ学文ナドハ思ヒセヨラヌリノ常ノ行跡ニテ思ヒヤラレテ若キ
者ノ手本ニスベキトナリ全山案此段ヨリ四十九段老来リ下トイヘル人タル者ノ平生ノ
心ガケラシメリサテ四十九段目ニテ云結テ例ノ兼好存念ノ無常ヲサトベキト云ニ歸せリ此段
ヨリ四十八段ニテハ老來テノ段ヲ書ベキ序ノ心ト見ルベシ此筆法アタマリ心ヲツケテ見ル
ベキモノナリ

持衣

持衣色ハ不定シ袖ク
リアリ若キ人ハウスビラ
ノ組崩黄紫等ノ交又紫白
△相華葉葉ニリ持衣ノ時ハ必馬帽ナシ
濃紫ノ指
貫ナリ紋ハ

あやれ竹のあえまの内

竹のあえまのあえまの内
あやれ竹のあえまの内
あやれ竹のあえまの内

白キ藤丸或ハ龜甲ナルベシ衣
冠ノ時其冬トモニ用ル持衣モ
勿論ナリ西宮記曰指貫王者
以下衆人共所用也古時ハ有制
臣下不用近代五位已上昇殿六
位用之

山案和名抄曰奴務
和名依師奴杖乃波加万
曰奴務色浅深隨年隨官可辨
酌也禁色之人織物不然之人志
々羅平絹壯年之人箕著木文
薄物或鳥多頭此ハ生織物自文
奴務高貴之人著之自十月御座
會比至四月御座前用練指貫自
買御座日至今月十日比生指貫

祢小女あひらけく見わさるるの影か人なり

源氏筆本ニナリ
ヤカニテコレ

うらや

河海ニ細々許女々野
源氏筆本ニナリ
ヤカニテコレ

あやれ竹のあえまの内
あやれ竹のあえまの内
あやれ竹のあえまの内

百首ニ小山田ノ稲葉ノ露ニソナ

ツノ人目モル身ハワビニカリナリ
古今ニ心カラ花ノ帯ニ糸チツク
ウケヒストクニ鳥鳴之壽

笛とえあふ
業平ノ他國ヨ

リ夜ゴトニ来ツク笛ヲ吹テニ糸
ノ后ニキカセタラモ歌ラモヒ合セ
侍ル盤

あふあふとて
此段上段

トヲヨミテ見レハ東坡カ李節
御ヲ尋テ風水洞ニアソビ影氣
アルヤウニ覺ヘ侍ル野色ノ事ハ
歷代ノ史ニヲホク見ヘク野

笛吹やとて山の際よ熱門のち内よりぬ

第一節

アノテ竹ト云ヨリ内ニ入ヌテ此段三節ニ分ツ文段同
是ニ山案此節ハ上ノ段ノ意ヲウケテ熱ニヤサニ

小そがちあふくゆく夜笛
えいこれ 添下と書ぬ
にわりのろ 首書有
とえあふべ吹とさびら
あふれとゆか知へきんせあ
とと思ふよゆらんあふれ
あふれとゆか知へきんせあ
とと思ふよゆらんあふれ
あふれとゆか知へきんせあ
とと思ふよゆらんあふれ

キコトヲ述タリサテ爰ニテラ一段トナレテ次ノ節ヲ別段トナス本アリサレドモ同
段ニナレテ見子バ義理スミガタシ其上請教大カタ一段ニナセリ

榻
和名集曰榻之知床也
字彙曰榻床狭而長者

廊
字彙文類曰廊殿下外
屋也句ナカク立タルヲ云
フリワタリ殿ト云堂ノ内陳ノ左
右ニロウト云所モアリ全

追凡
源氏東屋ニウチハラ
ヒ玉ル追凡イトカタハナ
ルニテ東ノ野人モオドロキ又ハナ
若紫ニ空焼物心ニクカホリ出
香ノカナド句ヒミチルニ君ノ御
風イトコトナレバ内ノ人々モ心ヅカヒ
スベカメリトアリ台

ようい
紅葉賀ニ大トノ
頭中將カタキヨウ

法師がまわりを敷きしめしめされくろ
ぬまといふ所堂のあふ
はよそ所佛本あふ
はよそ所佛本あふ
ぬまといふ所堂のあふ
あふまといふ所堂のあふ

衣裳の白ひも方めむ比は寝後よ

衣裳の白ひも方めむ比は寝後よ
人の物色をたのむに衣の葉
若小入り常の居るかど
春の山荘に殿あるべし

了廊は女房代遊凡よりいもど人目か

了廊は女房代遊凡よりいもど人目か
用意と書し衣のよをなと凡か吹らるるぬれよ
女房のちりあ
器めさぬと全

第二節

常任ヲタシナムベキコトヲ云フ小人タル者ハ人ノ見ル前ガカリヲタシナシテ我独居ル時ハタシナ
スゾ大学ニ入ル小人閑居シテ不善ヲナストイハル所思ニ合スベシ

公のまのふまげはらなはた野
山寮をのりてあはれ作りあてたる月もくろくさ
はらひてはさどあぬ末本も公の内ゆふまげはら
はぬと小あぬのねむをなはらあり

等いかにあゆみ流よらひもれて虫の音か
と、あゆみ流よらひもれて虫の音か
これいさむらむらま虫の表のれとてあやうかとなり
あゆみ流よらひもれて虫の音か

第三節
此段ハ女心ツカヒテホメタリ前段ハ男ノ事ナリ打トケタレト心ニク
トイヒ人目ナキ山里トモイハズト云ニテレルベシ人タルモノ人目ナ
キ所ニテハ心ノ、ナルニ慎ミタル体ライヘリツレぐノ人ノ身モ千節ニアタル一ヲ因縁
ノ説ニコトヨセテイヘリコレラ二段ニ見ルハアレキニ一段トツ、ナテ見ルベシ

一段之統論

一段之統論
此段ハ女心ツカヒテホメタリ前段ハ男ノ事ナリ打トケタレト心ニク
トイヒ人目ナキ山里トモイハズト云ニテレルベシ人タルモノ人目ナ
キ所ニテハ心ノ、ナルニ慎ミタル体ライヘリツレぐノ人ノ身モ千節ニアタル一ヲ因縁
ノ説ニコトヨセテイヘリコレラ二段ニ見ルハアレキニ一段トツ、ナテ見ルベシ

公世并良美
系圖
公實ニテハ
十段目ニシラ

鎌足不比等
房前真指
内磨冬嗣
良房

基經
忠平
師輔
公季
實成
公成
實季
公實

實行 正三位 公教 正二位

實國 正三位 公清 從二位

實俊 從三位 公世 侍從從二位

良覺 山門大僧正 正安三年四月

持公源法印資快 流之祖 推僧正灌頂

僧ノ極官ナリ僧兵

四月汝門弁ヲ以テ祖シテヲ殺ス者アリ依テ朝廷始テ僧正ヲ於テ僧官ヲ檢校セシム大僧正ハ聖武天皇御宇天平七年四月始ル委クハ書礼抄ト云モノ也 叢抄等ニテリ 教氏要覽曰史云正者政也自正正人克敷政人之故蓋以比立無法若

馬無善勤漸染俗風將非推則故擢有德望者以法而繩之令淨乎正故曰僧正 盤

一段之統論

此段ハ怒ルニシキ一ニイカレル僧正ノ事ヲ云テ大ベテ人ノ怒ヲ辨セシメタルベシ誠ニ登レヤスクレテヤメ難キハ怒ナリ不遷怒トイフハ顔子ノ学ヲ好ム至レルニ非ヤ人ノ異名ヲ付タレバトテカクイカルベキニアラス 句 此段言意ハ榎木僧正トイハバトテ惡シキ一ニハアラサルニ耳邊ノ風トハオサテ何トテカホトニハイカリケルヤ殊ニ榎木トノミイハレシ時ハ惡名ニハアラガルヲ切ク并堀池ノ名ヲ三重ニ得タル時始メテ賤アシキルニ分明ニ聞エシコトハモヲ吹テ賤ヲモトメタルナリ 參 此段賤ノアレキ事ヲイニシメタル段ナリ 愚ナル膜慧ノホムラ吹タテ、我トムカフル火ノ車カナ 眞 此段人ノ聞ニハヨルベカラズ已正レクハ外ハスツベキヨレナリ 盤 此段夫レ人ハ其德ニヨルゾ何ゾ其名ニヨラン名カ惡キトテ榎木ヲ切ラヨリハ何ゾ心ヲタレナシテ善ヲ求メザルゾトハ孔子ト聞ハ名ニ善ノ心モナケレド人カ聖人トレル奈始皇ト聞ハ人又惡王ト思フゾ是名ニハヨラスゾ其人ノ平生ノ行ヲ知テオルガユニカクウカム物ノ名ハ皆假ニ付タルモノナレバ何ゾ名ニヨランヤ又其德ニヨツテ付ル名モアルホドニ名ガアレキト思ハバ却テ德ヲ備メテ善ニ歸セバ人善僧正トモ云ベキヲ 弥賤立レハ弥愚ナトゾトナリ其上カク異名ヲ付ルコトハ古今多シメシ野樵參考等ノ諸抄ニクワシ今其二ヲアラハサシ 郭橐駝ハ背カニテリテ橐駝トイハル馬ニ似レバ人是ヲ駝ト名付ク駝我名ニヨク相應シタリトテ自ラ本名ヲカヘテ駝ト云フ 淵明宅邊ニ五柳樹アルニヨリテ自ラ五柳先生ト号ス 唐ノ方干ハ唇カケテ

僧正と云ふは... 首書有

なまの... 僧正といひしは... 此段夫レ人ハ其德ニヨルゾ何ゾ其名ニヨラン名カ惡キトテ榎木ヲ切ラヨリハ何ゾ心ヲタレナシテ善ヲ求メザルゾトハ孔子ト聞ハ名ニ善ノ心モナケレド人カ聖人トレル奈始皇ト聞ハ人又惡王ト思フゾ是名ニハヨラスゾ其人ノ平生ノ行ヲ知テオルガユニカクウカム物ノ名ハ皆假ニ付タルモノナレバ何ゾ名ニヨランヤ又其德ニヨツテ付ル名モアルホドニ名ガアレキト思ハバ却テ德ヲ備メテ善ニ歸セバ人善僧正トモ云ベキヲ 弥賤立レハ弥愚ナトゾトナリ其上カク異名ヲ付ルコトハ古今多シメシ野樵參考等ノ諸抄ニクワシ今其二ヲアラハサシ 郭橐駝ハ背カニテリテ橐駝トイハル馬ニ似レバ人是ヲ駝ト名付ク駝我名ニヨク相應シタリトテ自ラ本名ヲカヘテ駝ト云フ 淵明宅邊ニ五柳樹アルニヨリテ自ラ五柳先生ト号ス 唐ノ方干ハ唇カケテ

魁ノロニ似タレハ 缺唇先生ト云フ 醫師ニ逢テツクロヒケレバ 補唇先生トゾ申シケル 或時人ニ逢テアロマリテニ拜シケレバ 又方ニ拜トゾ申ケル 後ニ鑑湖ニ隱レ居テ山野ヲアリキケレバ 方處士ト号ス 身マカリテ後門人玄英先生トゾ謚シケル 又佛弟子ニ橋梵波提ト云シハツ子ニ牛ノ如クニレカカミシ人ナレバ 龍名ヲ牛同ト号ス 迦留陀夷ハ其容貌ヒナヒテ色黒カリレカバ 譯レテ黒光ト云レト 經文ニテノセラレタリシカレ何ゾ此僧正一人ニカギルヨウニ履立セシガ 説 ● 山案此段モ前々ノ段ノ意ヲウケテ人タル者ノ平生ノ慎ヲ教ヘタリ

強盗

庭訓性来ニモ 強盗 二盗トアリオレセテ

柳系乃色小強盜法

ススムヲ強盗ト云ヒソカニ忍ビ入テ ススムヲ竊盗トス 續高僧傳 二十一天台大師傳曰 夢逢強盜

号正信傳ありろわらひく 強盜よをさるゆへいふあせ

いふて

南都ニ強盜法 師ト号スル僧ア

法字あさるとも

百書有

り悪人ノ中へ交テ盗賊ヲナス 夜中人ノ家ニ忍入ニモ人ヨリ先ニ入又人ヨリ後ニ出 財物ヲ分ツ時モ人ニクレテ已ハトラズ用ノ在ニ時ハウクベレト云久シテ賊徒ヲス、メ悪ヲ改メ善ニ趣メント思心アリ是ニヨリテ強盜法 師ト云名ヲ得タリ 委見沙石集

一段之統論

前ノ章ト此章人我相ヲイシメタル段ナリ 前ノ良覺ノコトハ他ヨリ我ニ惡名ヲツケル時無念無相ニレテ其ソレリヲ何トモ思又

様ニコソ心ヲバオサムベキ物ヲトイフ義ヲオシヘタルナリ 又此強盜法印ノ事ヲ載タル人ニムサト惡名ヲイヒカケントスルーナカレ實否ヲキハメテ物ヲ云フベキフト 此法印ノ名ヲキケハ強盜セシヤウニキコユレバナリ 参 ● 此段人ノ名物ノ名道理ヲ問テキハムキトナリ今モ柳原室町ノ腰ヌケ風呂トテアリウチ聞タルハ風呂ノ名ヌケヌトイフ名ノヤチレドモタツテイラレヌト云義ナリ 取ナレニヨツテ聞アレキ名ヲツケヘカラスト云段ナリ 毒 ● 此段ニテ兼好ノ仁心シラレ侍ル 夫名ニ五ノ品アル 春秋傳ニ見ヘタリ 後世ノ餘呼スクナカラヌ 跡カ盗賊タルニヨリ 盗跡ト号スルハマコトニ惡名ナレドモ人ニヨリテカハルシ衛ノ君ノ名ヲ惡ト云ヒ其臣ニ石惡ト云者アレド必モ惡人ニ定メ難シ 僞如ハ夷ノ名ナレドモ叔孫得臣夷ヲ討テ其子ヲ叔孫僞如ト名付 鴨夷ハ馬ノ皮ニテツクル袋ナリ 吳王是ニ子昏ヲモリ殺ス 范蠡ノレイイニメテ自ラ鴨夷子皮ト名ヲカヘタリコレニヨリテ見レハ名ヲキ、テモ其實ヲ委ク尋ズバ人ヲアヤルアルベシサレド又義平カ伯父義廣ヲ討ニヨリテ惡源太トヨレ 景清カ伯父大時トイヘル沙門ヲ殺ス故ニ惡七兵衛ト号セラル、類アレハ其行跡ニヨリ名モシタガヘリ 函房ノ謚ヲ子孫トレテアラタムル一アメハサルガゴトシ ● 山案一説ニ此段ハ此法印ヲ以ノ外ニ耻シメル意アリ 夫出家ハ一衣一鉢ノ者ナルニ此法印カ欲深ノ財室多ク蓄ヘ置シ故ニ數度強盜ニ逢シツカシ俗トレテサヘ欲フカキハアレキニ況ヤ出家ノ身トレテラヤ古語ニモ室多害トイリ此説モ一轉レテ面白シ但シ何レノ説ニ隨フトモ此段モ前段ノ心ヲウケテ可見此法印ノ平生ノ行ヲモ不知シテ只名ヲバカリ聞テ謾ニ惡事ヲ云ヒカケレシキナリ 又此法印カ常ノ心入ガアレキ故ニ加様ニ度々強盜ニモ逢ケルト云共ニ此法印カ平生ノ行事ガヨカラヌ故ニカクヨカラヌ 又異名ヲツケケラル、ナリ 兎ノ角常ヲタルナムヘキコトヲイハリ

法

・彼寺ノ縁起ニ寶龜四年ニ法門延鎮夢

ニ感シテ此龍ノ下ニ来テ行磨

ト云フ翁ノ教ニ依テ此地ヲ求メリ彼翁則觀音ノ應現ナリ其延曆年

中ニ田村九ニ相カタラヒテ寺ヲ建

文六ノ千手ノ像ヲ安置スト云

河海云宝龜十一年初建立延曆

十四年官符畧而至以田村九私宅寄附ニ云 元亨親書ニ宝龜九年四月ヲ夢ノ年トシ延曆十七年ヲ建之ノ年トス三説不同親書ニ

尼 三藏法數十六云梵語尼華言女

伊勢物語ニナトイラヘモセテ在

ヤ、ヤ、ト八人ニエカケタル詞ナリヤヨナト云類欵ヤヨ時

兩ナドイヘル心ニテ呼カケ詞

多ひら付くゆ

山案袖中抄ニ曰 出テユカシ

入ヲトシメシヨシナキニトナリノカ

タニナモヒカヌカチ 頭語曰ハヒ事イ

カニモヨカラヌ一ノ年如ニモ 龜ヒリ

ニバ祝事ヲイヒテ祝フニセバハノ

所へ行ニル初ニトナリノ人嚏ラン

ヲ獸テモクセクシカラシ人ハ立トニ

ルキナリ 容齋隨筆 第四云今

久噴嚏不止者必嘆唯祝云有

又説我婦人尤甚云 拾芥曰嚏

時頌 休息万命急々如律令

大金曰 問嚏ニ何ナル故ニ厄害

ト云ル云 答曰 息災トテワサハヒ息

ニラハル此ナリ息ノ鼻ニトシ

時クサメアルノナリ既ニワガハラ

キガシアラハルトイヒツタヘテ

或人

法ありまのりける

老るる尼のめはまらるる

尼の字ハ梵語ニルニ云

此ハ尼といふも女ニ云テ

公わりいあやのりま

備道ノ入一後を母と

ちりり尼のまより

ひりりりりりり

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

まはまらるる

子集註曰 竟 執竟也 人氣感傷
附 勸 又為風露所襲 則有是疾也
輔氏箋曰 寤 則憂而不能寐 思
則感傷 氣閉而成疾也 今俗人竟
曰 人道我 此古之遺語也

山案乳母

山案乳母
シナフ君ユニ

カク云ナリ 神代卷曰 疾火々出
見 尊取他婦人 為乳母 湯母及飯
湯 湯坐人 凡諸部 備行以奉養
焉 于時 權用他婦 以乳養皇子焉
此世取乳母 養兒之緣也 同纂
疏曰 取他婦人者 內則曰 於諸
母 不可者 必末其寬 慈惠 溫良
恭敬 慎而寡言者 使為子師
其次 為慈母 其次 為保母 皆居子
室 今取乳母 亦可 狹有婦德者
乳母 謂以乳哺兒者 養子之道 母自乳者 是禮也 然後世或亦有 用他婦 故舉其始也
日枝山又曰 山トモ書ナリ 天皇 王都ノウレトヲニ 靈鷲山有故 日本ノヒエノ山モソ
ニカトトリテ 玉城鎮護ノ 靈地法華有緣ノ山ナレバ 鷲ノヲ山トモ云フ

比敷心

比敷心
ニカトトリテ 玉城鎮護ノ 靈地法華有緣ノ山ナレバ 鷲ノヲ山トモ云フ

一段之統論

此段世ノ君臣ノ間 尤偽リ多ク 面ニテハシタガヘトモ 退テハ君ヲ諂リ
且ウラムコトモアリ 殊ニ女ハ情ヒガミテ 表裏多キ者ナルニカク 時
モ見ノ事ヲ忘ス 又ハ愚ナガラモ 殊勝ノ事ナレバ 是ヲレシテ 忠ヲ竭スベキ事ヲオシヘタルヲ
此段此尼ガ 仕業ハ至テ 愚痴ナルコトナガラ 倍ノ志ノ所ハ 如期アリタキトノ 教ナリ 説
評曰 此尼素為 見侍母 故有 養育之愛 強不可 君臣愛敬之證 參 山案此段モ 前々
段ノゴトク 平生ノ意入ノ 第一アラハセリ 此尼ハ 愚ナル心カラモ 常々 不急加 様ニ思フニ
有難キ志ナリト云

光親

按察使權中納言
二位号堀川中納言
也 兼室大納言 光親之孫 權中納
言 光雅之男 承久三年六月出家 法
名 西親 同七年十二月於 駿河 被誅 文

系圖

系圖
冬嗣ニテハ 二段目
ニクワレ

鎌足 不比等 房前

真楯 内膳 冬嗣

良門 内舎 高藤 内大

近江の國なり 首書有
此比敷心 小かろく まんり
只今も やまのいんと思
へば かくせうと せうの字
アリ 難く志をわかん
意好判之 彼尼ガ 仕業ハ 愚痴ナルコト 似多ク 實ハ
あ難キ志ナリト云

かろくとせせば 何とあひ志

の比敷心 小かろく まんり

只今も やまのいんと思

へば かくせうと せうの字

アリ 難く志をわかん

意好判之 彼尼ガ 仕業ハ 愚痴ナルコト 似多ク 實ハ

あ難キ志ナリト云

光親 院の最勝 傳

わくわく せうの字

おめされて 佐とがくれ

てくハ せうの字

らゝ せうの字

衡重と 衡重と 衡重と

傳言有

後 羽院の 衡重と

前 小く

院の 衡重と

食 衡重と

定方 從二位 朝頼 從四位上

為輔 正三位 宣孝 正五位下

隆光 正四位右 隆方 正四位右

為房 正三位 頭隆 正三位中納言

頭頼 正三位中納言 光頼 權大納言

光雅 正二位權中納言 光親 正三位權中納言

東鑑二十五承久三年七月十二日
按察使郷光親去中者為武田
五郎信光之預下向而鎌倉使
相達于駿河國車返邊依觸可
誅之由於賀古坂島首訖時
年四十六

一段之統論

此段ハ最勝講ノ奉行名ニヨリ威儀ヲツクロフイトニナク物クヒ
ナラシタルツイカサヲ其ニサレオクノ急シキ時ハカクアル

簾の中へ入ておれ
女房あかへるる誰にせれ
院の桑屨為案抄よ 塩囊抄小腋黒と書て心
わがわ わかハ嘸嘆す
女房 誰にせれ
首書有 女房遊のくりしれり
とてつるさどP何れもいれ
あ穢の物さすいやん事
擧ぐと書てたつるあひのを
かんともわらとぬる感
なせぬひさるるもど

老老として始て



老老なりて始くるる

朱文公勸學文勿謂今日不學
而前日加謂今年不學而有來
年日月逝矣歲不我延嗚呼老
矣是誰之愆 野 家隆ノ歌
明日逝ト思フ心ヲユマリ今
日ス化ニクラスハカチテ諸
李卓吾評
古語曰古人

人の命ハ今日明日とあるぬわかたれ不あるさうりは
世も此れとありとなりし老くるるとゆふ人との不事
かくるる内しつとゆふと 諸 首書有
是とゆふ事かたね古語
かへくハ事さあまのり人

第一節

老来テト云ヨリ人ナリニテナリ此段四節二分ナリ見ルベシ
文段是三回 此一篇ハ古語ヲウケテ一段ノ大意ヲ擧ゲ
夕リ加様ニ少年ノ人早クワセテ多ク墾トナレルヲ見ハ無常ヲ待ニ油断スベカラストノ心
ナリ興ニ無常ノ來ルハ水火ノセムルヨリモスミヤカニトイヒ死ハ前ヨリモ來ラズ兼テ

ウレロニセリナドイヘル段首同シナリ

さめらる此あや

まねる・莊子遺篇 瓊年六

十而知五十九年之非・非謂明 歸去來辭 覺今是而昨非 身 傳心法要曰 杜用 千年功夫 今日本省前非 參

あやまわと・一ヤ 一リ

トイヒ出レテソレヲコトハリ・問答ノ筆法ナリコトハ 誠心ノ二字ヲイヒタルナリ明日スベキヲ明日スルハ懈ナリ今日スベキヲ明日スルガ念ナリ今日今日道ニシムクナリ 安樂行 除懶墮意及懈怠相 未段ニイヘルゴトク法師ニナシ者ガ馬ニ乗習ノ類ニタトヒ

馬ニ乗得テモ持テキ器置ナケル招待レテ馬ニ乗ルキ時モナクイダツラゴトナリテナリ是スニヤカニスキ事ヲ變ニシテ我ニシキ所ヲユル故ナリサテ其益ナキ時ニイタリテ後悔スルモ用斐アルミビケレハカ下時モスニヤカニツトムベキナリ

第二節

彼期ニ整テ後悔アラシコトヲ云リ・文 山案此節ハ心ヲ付テ熱心讀スベシ釈氏ノニニカギラス儒者武王高ノ家ニテモシクノ我道ヲハ遊ニ六勤ニスレテ殊事ニ心ヲカケテ益ナキ身ト目ヲ暮スモノ、聲ノイニシメニ書リ・此所ハ老病死ニ吾倫 之不言生者人先已受之可追來者故只言三苦也其實則通於四苦而已

人ハキミニ 無常ナリ身ニ 世海リぬるも とんむ

迎と書る・古 迎と書る・古 迎と書る・古

あやの境なり

さうらさふ小病と受け

て忽小い世とらんとする

時よこそ初とさめらるる

のあやまれる事ハ志ハ家

なれ何やさるるといふを此

のさふ何の思ハさるるといふを此

とんむとくはせとくはせとくはせ

さうらさふといふとくはせ

さうらさふといふとくはせ

さうらさふといふとくはせ

さうらさふといふとくはせ

さうらさふといふとくはせ

新古今二

其野

ユル鹿ノ影乘ノ間志シクツ
思フイモガコ、ロウハ雲抄裏
間合人バ草カリテツカスルホト
イリ時ノ間ナリハ鹿ノ影
来ノ間ハ鹿ノ影ノ影ヲ生ル
時一東ハカリニシレカキヲテ
其月ニ角ヲ生ル故ニ其野ユ
クトヨメリ 野 ●ツカノ間ハ
時ノ間ナリツトト、ガトキト
五音相通ニバナナリ 或説

第三節

レズハ其好壯年ノ久モ公道修行ニ懈怠アルニキソト心ナリ 文 ●山案此節上ノ兩節ヲ結テ生死事大無常迅速ノ事ヲ常ニ心ニワスレズ後生菩提ヲ第一トシテ佛道修行スベキコトヲ教ヘタリ一時ヲモ油斷スベカラストノイニレメ尤有難シク白樂天詩云花姿安春暮不棄前可當月舞每秋候不傾間盛勵古長歌行曰壯不努老大徒傷悲此等ノ文ノコトナリ 盤 ●是を松園なり ●聖字前集

火急

文選三十七日別前臨門急於屋火

▲俗華詩火急將書懸驛使 ●東坡詩三出タリ東坡將至 ●先寄進道遠三猶子詩惟痛火急作新詩下醉兩翁勝酒甚

禅林の十因

●弘法の中 ●二其名ヲ

三フヨリモ所ヲヨフカウヤニ義ナリト侍ル故ニヤ秘觀律師ヲ作リ玉ヘル從生拾因トテ一巻ナリ 往生浄土修行ニラ因縁ヲ立テ教ヘラレシ書ナレバ十因ト云 二十ノ字ヲ拾ニ作レリ 參

十因トハ

●廣大善根故 ●變罪 漸滅故 ●宿緣 深厚故 ●光明攝取 故 ●五聖賢護持故 ●極樂化生故 ●三業相應故 ●三昧獲得故 ●法身同体故 ●隨順本願故 ●按

しとうあまきたりのまもごと

●釋云と書り句 ●二付のち也 釋云 諸 〇 〇

●五折ふあぐぐ文 ●おのちもとまらんわぐぐ 〇

ふあまーしーあまーしーあまーしーあまーし

うはせれ湯りもらぐぐはた

●獨世の塵相とつゝ

●其意あらま

とほとむるをもはめあ

きん

●人ハタト云ヨリニヤカナラガラシメテナリ

●此三節ハ彼油断ハ無常ヲ忘ル、故ナリ無常ヲ忘

レズハ其好壯年ノ久モ公道修行ニ懈怠アルニキソト心ナリ 文 ●山案此節上

ノ兩節ヲ結テ生死事大無常迅速ノ事ヲ常ニ心ニワスレズ後生菩提ヲ第一トシテ

佛道修行スベキコトヲ教ヘタリ一時ヲモ油斷スベカラストノイニレメ尤有難シク

白樂天詩云花姿安春暮不棄前可當月舞每秋候不傾間盛勵古長歌行曰壯不努老大徒傷悲此等ノ文ノコトナリ 盤 ●是を松園なり 參 ●聖字前集

じうト育多るむで 〇 〇

人暮りて自他ハ要事と

●松園ハ陳じて云

●我ハ今ハ今ハ肝要の事

よあまきていとく 今火急

うらあて 読ま約々小

●松園の材料と句

●拾因ハ此書ニ絶えりといふ

ままれりとして 身とふ

さくさく念仏して 読よ性

●恥ぢて自己の要々ふりく

●書の対

性成とげりとは 禅林の十因

●東山宗觀堂ノ禅林とて説かれ、永觀律師の作まふか 耶の性成十因一書あり 諸

スルニ性生十因云傳聞有聖念佛
為業專惟寸陰若人來謂自他
要事聖人陳云今有火急事既
逼於且暮塞耳念佛終得往生

心戒

●念集ニ云ク心戒
房上テ居所モ冠交

風雲三跡ヲニカセタルヒレリ有
ケリ俗燃花園殿ノ御叔ト
カヤハ鳥父臣ノ子ニシテ冠
鞆トテアノ守ニナサレシナ
リケリ 盤●或曰心海妙心
海之ノ歌ハ新後撰ニ見ヘリ野

うんじくまり

●此段上ニ光親卿ノスミヤカニスベキ一ノヲハカリテツイガサ
子ヲクヒテテラレテ出ラレタルコトヲイヒタレバコニハ佛法ニツキ

道ニハ心ヤスクレリサレスヘテ居ルキ所ナキ故ナリト云 盤

第四節

●ムカヒアリケル聖ト云ヨリ終ニテナリノ●第四節ハ
無常ヲ待クガニ油断セバレテ終ニ性生ノ

一段之統論

●此段上ニ光親卿ノスミヤカニスベキ一ノヲハカリテツイガサ
子ヲクヒテテラレテ出ラレタルコトヲイヒタレバコニハ佛法ニツキ

菩提ノ道ヲ急グベキ事ヲイフナリ世俗ノ事サレソキテヨキニツキテ其外ノソ
コヌルハカ一ハヌ一ナルニイハンヤ道ニ心ガスニハ外ヲステ一節ニイソゲトナリ 盤 ●此
段ハ上ヨリ此カタ世間ノ事ヲ大カタイヒワタレテ此章ニイタリテレキリニ無常ノ切ナル
一ヲ告テ免ニ解油断ナク後世ノ道ヲイソクメレト 鞭策ヲクハハレタルナリ 參 ●此段ハ上
四十三段春ノクレッツ方ト云段ヨリノ結段ト見ルニ皆平生ノ心掛ヲイヘリ佛道ニカギラス
萬葉モ必ズ以テ油断スベカラストノ教ナリ其期ニ望テ驚キテ平生ノ懈怠ヲ後悔スル
カ世人ノ癖ナリヨクくツハレムベシト云 説

小侍心戒と云々

●心戒傳記 首書有

あまのくににけせのりり

あまのくににけせのりり

あまのくににけせのりり

あまのくににけせのりり

あまのくににけせのりり

●尊路 首書有

徒然草諸抄大成卷之六目錄

五十 女の鬼オニ之ノ候

五十一 大井川オホイヅカハのノ舟フネ代ト候

五十二 仁和寺ニョウニのノ法師ホウシ石イシ清シヨウあハ糸イト指サシせシ候

五十三 鼎カマとカ頭カシラふフつツろロうウ候

五十四 衣ウレのノひヒらラりリ候

五十五 家イヘのノほホらラりリ候

五十六 久キウしシくク痛イタうウ候村のノ候村よりヨリ人ヒトとトよヨりリぬヌ人ヒト

との物語モノガタリとトるル事コト

五十七 旁物語のありありの候

五十八 万んあらむに候なりきりし候

五十九 大寺とあひまゝ人のあはれむとまゝのべき候

六十 盤親修教の候 付あらうかひり事

六十一 此處の時鐘落しの候

六十二 延政門院のあり候

わくのわり

伊勢物語三 井テイキケリ

恋長乃比伊勢屋より女の

西園寺

其比ハ西園寺殿ヨリ 後イリ玉フツツ

鬼小なわらうとわくのわり

キタル故ニサカヘ玉ヘリサルニヨリ テカク書ナリ 盤

あわといふ事あえてを比サ

目ざらむ日よふ。東向川の人の鬼見ふとさく

かへどふ。此の西園寺小糸りあひりし。と目

文。山菜歩時威勢のありしに故大臣實兼公た官公衛公

は院まのいづへ。其今もそこくふあどいひあり

はまのいづへと云人もれし。上下あひ鬼

れまのいづへやれど。此東山より。安居

院井多ニ入ルゆリゆリ小ニに来よリつクこノ皮法

●悪好を向ふとむれは参

●或は小一定と書りある参

人ニ劣キ小ニとシてちろ一糸ハ宝所ノ鬼あり

とウちラ何カり今か河の邊ノ見られる也

むヒの所橋交たあり又よシて現わりへリ

●むヒノ一糸大初メよわきの糸とは見ゆの用也
●乃ハ橋交たありトシ事

●通リゆル所もなしトモ参
●六名物ハなしトモわきとシる也野

をあく次立ニみらりとわく初メなしる也

らざめりとシて人と知りて見らる也

ありと知れル善ららシく立つコトハ災也

てハ剛神とシりて法也とシき事たある也

●乃ハいわるともとうとて噴吐の狀也

ゆりとシて皮鬼の瘞也いはる也

とありとしるとシふ人もゆりとしる

●それハさしりし事も初陽ありハ附の鬼ノ統也いはる也
●三日ようういわる人相とありハからいニ三日の鬼ノ瘞也
●瘞氣乃ハいはる也とシて心を雷せんといハいはる也
●それハ怪人とシて心を雷せんといハいはる也
●乃ハいはる也とシて心を雷せんといハいはる也

一段之統論

●此段世間ニ毎々カクノトキノ餘リライニ出スヲ必ス信シ敷カ
レガルヤウニト敷ヘ又末ノ段ニ二月三日病ル事ヲ書ルハ凡ソ人ノ
氣ハ本天地ノ氣ナリ故ニ常ナラヌ又書ルアルトイニ常ニカハル歌曲アルヲ濫言ト云ヒア
ヤレキ衣服ヲ著スル人アルバ服妖トイニ草木ノ氣ニ天地ノ變氣ヨリ妖孽トアラハル是皆
理ノ自然ナリレカバ實ハナレトイヘトモカクアラハスハ四千有ナリ上一人ノ政タレカアラヌ

特ハカチラス妖言妖術ノアルコトヲ記スルヲシ
加様ノ奇怪ナル雜説ノアリシハ其此凶事ト見ヘタリ
ナキニアラス漢成帝ノ時ニ訛言アリテ只今洪水イタラシトス長安城中大キニカハキ帝ヲ
ハジメ山ニボラシ船ニノラシナドアリシヲ王喬スコレモアハテタルコトクイツハリナルベシトカ
タク申ケレバハタシテ洪水ナカリケリ日本ニテモ怪異ノ物語ハ人々スルヲナレド我コソタレカ
ニ見タレトイフ者ハ一レナリ然レドモ君ノ徳ナク政アレケレバ天地ノ和ヲヤアル故ニ非常ノ事
モイタルベシ野 ● 夫天地ノ間ニ何莫カ鬼神ノ態ニアラスト云フナレトモ委ハ南秋公カ鬼神論ニ
出タリサレバ人ノ一身ニテイハ起ラ神ニトリ 寤ラ鬼ニトル晝夜ニテハ晝ヲ神トシ夜
ヲ鬼トス生死ニテハ生ハ神ナリ死ハ鬼ナリ天地ニテハ天ハ神ナリ地ハ鬼ナリスヘテ陽徳
ニテ發シ伸ルヲ神トス陰徳ニテ屈シ隠ルヲ鬼トスサレドコニイヘル鬼ハ別ニ異秋ノ者
ツテ人ヲナヤスル物ヲ古ヨリ鬼ト云フナリシカレドモタレカニ見タルト云フ者ハナキナ
リ大江山ノ酒天童子鈴鹿山ノ鬼神ナトモ人ニアラヌ様ニ云ヘドモサニハアラヌ右ニ云フ如クニ
此者ドモ人ニカクシ居テ山賊ヲナシケル故ニ鬼トハ名付テ云フナリ別ニ異秋ノ者ノアルニハ
アラス故ニ此時ノ女ノ鬼ノ物語モ虚事ニテアリシゾサレバ理ノ明カナルコトハ神ナリ理ノクラ
キヤチモナキ事ヲ云カ則鬼ナリ此時万人此取汝汝ニクラサレテトモニ心ヲウゴカレ足ラ
ソラニニドフハ是スナキ萬民ノ心カ鬼ナリ其鬼ナリシ濁氣ガ感ニテカヤウニ病ヲモウケシ
ナリサルホトニ少モ心ヲウゴカス故ニスニキトノ教ノタメニ此段ヲカレシト見ヘタリ加様ノ
虚言今ノ世ハ猶以テ多キナリト意得アルベキコトナリ 説

龜山屋

● 龜山院ハ八十一
九代ニ嵯峨ノ
龜山屋ノ御隠居アリ

● 故ニ龜山殺ト申シ壽 ● 今ノ天龍寺ハ昔
ノ帝居ナリト云フ ● 山宗龜山院
● 恒仁後嵯峨代帝 皇子西大宮院藤原
● 皇子太政大臣實氏女也建長元年五月
● 廿七日降誕同八月十四日為親王同五年十
● 月廿九日若禰 五歳 正嘉三年八月七日癸未
● 子十歳 正元元年十月廿六日受禪 十歳 同日
● 月廿六日即位 應元元年十月廿六日御禊 同十二月廿六日大嘗會 永承十二年正月廿六日讓位 治天十五年 十歳 正應二年九月
● 廿日御出家 十歳 法護金剛源御成師太僧正 遍嘉示三年九月十五日崩 壽五十七 號禪林寺院 ● 水鏡云嵯峨ノ
● 龜山ノ麓大井川ノ北ノ岸ニアリテユシキ院ヲ作セタマヘル小倉山ノ稍トナセノ瀧モサナガラ御垣ノウチニ見ヘ
● テワサトツクロハ又前裁モオノツカラ情ヲクハタル所ガライミシキ繪師ト云トモ筆ヲヨビカタシト云 蓋
● 續後拾遺集ニ 方代ト龜ノ尾山ノ松陰ヲウケテスメル宿ノ池水太上天皇御製也此御池ノナリト云

大井川ノ水

大井川ノ水
大井川ノ水
大井川ノ水

水車

● 日本紀神功皇后傳 爰定神田而佃之時 引 備河水 欲潤神田 句 西行歌ニ
● 一スゲヲフルアラ田ニ水ヲマカスレバウレガホニモナク 蛙哉 家隆ノ歌ニ 庭ノ面
● 日本事跡考云大井川自丹波流出 ● 續古今ニ中務ノヨムル 大井川
● ソコニモ見元龜山ノカカラス影ハ幾世ヘスラニ句
● 日本紀神功皇后傳 爰定神田而佃之時 引 備河水 欲潤神田 句 西行歌ニ
● 一スゲヲフルアラ田ニ水ヲマカスレバウレガホニモナク 蛙哉 家隆ノ歌ニ 庭ノ面

水車

● 尋到源頭白水車器乃魏馬鉞初作之令兒童轉之以灌園更出更入巧倍于常亦
● 謂之翻車云云又陳云非水車詩 江邊綠水車鳴我自平生愛此声 風月一時都屬

トセリ句 ●此段ヨロヅニトイフニテ水車ニカギラズト云フヲ知ベレ一フライヒテ其理ヲ
万事ニ推シテシラスル筆法其道ヲシラ子バドフ之迷ハツレクナラズトシルベシ
●山案此段ハ論語ニ曾子ノ死期ニ及テ孟敬子ニ告ゲ玉フテ遺豆之事則有司存トアル
心ヲ以テ見ルベシ遺豆ハ人間大禮ノ其一ヲタスル器ノ一サヘクハヒキフハツレクノ奉行ニ云付テ
トリヲコナハスルソ況ヤ其外ノ事ヲヤシカルニ我智ニ慢スル君ハ微少ノ事ニテ我一人シテ行
ナントスル故事ガシラメナラズ又昏君ハ人ヲ見知ラザル故ニ其器量ニカナハサルヲ云付テ
ナサスルユニトノハスサレバ家隆ノ歌ニ 列ノツカラ得タ所ノ其オヲツカヒアテヌハアハレナ
リケリ此末ノ一句ヨクク可著眼

仁和寺

五十九代宇多天皇 皇昌泰二年十月

仁和寺小石清水法師の御書

十四日御落髮有テ法諱 空理
ト申奉ル延喜四年ニ仁和寺ニ室
ヲ宮ミラハシケルヲ俗ニ是ヲ御室ト
申トカヤ御門跡ト云モコニハ此
此法皇ハ皇子院トモ寛平法皇
トモ申シメテツルナリ諸

石清水の

山ニ清浄ノ水アル 故ニ石清水ト云其

水ノ涌出シ由來ハ神社考ニ見
タリ ▲神社便覽曰石清水 式外

山城國久世郡八幡大神宮三座東玉依
付心ひらく只をわらわ
るる石清水をゆりさる
字れむをうくまて何
とふいふのや
あ説ニ或字増鉄 五字 諸 仁和寺の
とせは師とつるを之或の字ハ
とつと文法ハ或字やとつと説

●山案諸社記曰石清水神
案以此神宮為天下第二宗廟分王依姫置東殿等蓋有深旨哉雖然非系清らるる
不肖所及也故今省略焉 参 ●王依姫トハ神武天皇ノ御母ナリ ●山案諸社記曰石清水神
次第之事本社依為八幡第一應神天皇也第二神功皇后也父神 是天 御座 御座 仲哀天皇第三
神功皇后討三韓時坐胎中母神与利即位之賜故尔第二神功止須原也第三仲哀第四仁徳天
皇也云此注兼右之注秘中之深秘也云 ▲公事根源曰人皇十六代御門應神ノ御事ニ仲哀
天皇ノ第四ノ皇子御母ハ神功皇后ニ胎中天皇トモ又八幡田天皇トモ名付奉ル天下ヲシロシメス
四十二年百十一歳ノ寶篋三尊ヲタモセ給欽明天皇ノ御代ニ始テ神ト顯テ筑紫ノ肥後國葦形池ト云
所ニ跡ヲ垂玉フ人皇十六代菅田八幡丸ト云託宣アリキ菅田ハ本ノ御名ハ幡ハ垂跡ノ号後ハ豊前
國宇布ノ宮ニシヅリ給ヒシ云 清和ノ御時大安寺ノ僧行教字作ニミウデタリシニ其告アリテ今
ノ男山石清水ニウツリスセ玉フシカアリシ後ハ行幸モ奉幣モ石清水ニテリ一代度宇佐ハモ勅使ヲ
テツルニ所宗廟ト申ハ天照大神并八幡大菩薩ノ御事ニ云 ▲又案スルニ八幡ト云御号ノ事ハ管崎
起日昔白幡四赤幡四自天降干此故名八幡植松而為標至今猶在 ▲其外宇佐縁起公事根源等ニクワシ
●貞觀年中ニ和州大安寺ノ僧行教筑紫宇佐八幡ニ参リシ時大菩薩夢ニ見ヘテ汝王城ニ歸ルヘシ
我モトモニ行テ天子ヲ護ラント宣フ行教夢覺テ奇異ノ思ヒヲナシ都ニノホル特山崎ニ至ル
其夜又夢ニ我任所ヲ見ヨトノ玉フ覺テ見レバ東南男山嶋峯ニ大ナル光アリ行教則夢聞
シテ勅使ヲ立ラレ宇佐ヲ此所ニ勸請シテ新宮建立スルナリ行教ハ幡ノ神跡ヲ辨シ
ト祈念スレバ阿弥陀觀音執至ノ三像袈裟ノ上ニ現シ給フナリ以上 神皇正統記元事
叙書等ニ見ヘタリ

極樂寺

八階宮護國寺
富安宗開山也

起曰太安寺傳燈本法師位安宗
謹言如藍壹院号曰極樂寺
山城國又無即科寺上里
石清水八幡大菩薩三所
天帝親天神地祇兼師僧父母六
親眷屬三有法界有識無識皆
悉為令性生極樂淨土以去元慶
漆羊始所建立也云安宗者行
教和尚之弟子也

高良

高良ニ上ノ高良ヲ
高良トテ二社アリ平

二社註式有書曰石清水別當澄
清曰上高良武内也下高良垂也
神社啟蒙曰上高良按日本紀是
天皇妃伊香我色諾命生皮太忍信
命是武内宿禰之祖父也景行天
皇三年屋王忍武雄心命請紀伊
國居阿備栢原娶紀直遠祖也

道彦之女影媛生武内宿禰由是
見之孝元子皮太忍信其子武雄心
其子武内也武内九事六君
仲夜神切其壽殆三百十餘歲其事
迹詳于書記蓋有武功之人也
下高良 在外院南 師時記曰江師
曰高良大明神者武内大臣也非也
高良者藤大臣連保也神号曰高
良玉垂命以下滿兩顆令奉行之
故奉号玉垂云 按神社考以高良為武内宿禰又引
一説為玉垂以上下二神為一別有據歟

先達

法華教曰彼諸大士是前輩先達

一段之統論

此段モ前段ト同心ニ結句ニ先達ハアラマホシキ一ニトイフヲ以下
肝心トスルナリ 專 此段モ前ヲ承テ我意ニ任スレバ必ズ違アル
ヲ述ブ 此段ハ物毎ニ知ヌブリラヌル事ヲイハシメテ此法師カ年寄
テ所ノ様子ヲシラスモ餘リ無下ナルコト、思ヒテ人ニモ不問先達モ不
本社ヲモ拜セズレテカヘリシナリサレバ世ノ譏ニモ問ハ特ノ耻問ヌハ
費ハナカシカモ成就セズ宇治ノ里人ノ能仕覺ヘタル者ニイタサセケレバ
外早ク出来シテ成

まふて多り極樂寺なるは

と云持てうらむりともわく

ふふりさそ傍の人よあ

ひくも思ひつる事さ

しゆりぬささくもさ

ゆりとも地ぢりさ

さ糸さる人さ心への

何事りあるんゆりさ

と祈へまひりさかい

心思ひく心さハん

といふ心ささるさ

先達ハあつゆりさ

後亦有るはあはれは

もむらもむらてわ社の心さ

神の中書あり論語は及

案内者の公諸

此乃一段の肝心なり

程自明ヲトノヘリ何事モ我意タテスレテ能先人ニ仕スベキトノイマシメテ残セリ説

程自明
漢書作童子▲集成十
五以下語之童子童獨也

言未有家也▲説文未冠也
和名集二曰説
文曰三足兩耳

和五味室器也▲鼎ノ字ヲヨメリ

拾遺ニ津ノ國ノ難波ワタリニ
作ル由ハアレカチカモ見ワケガナリ野

法師よあふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

あふんとと何名跡もそ若あそぶ

乞も 仁和寺の法師 童の

初段に
初段の
初段の
初段の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

法師の
法師の
法師の
法師の

る事かぶる事か一醫師の許ふて入てむじ

●もあゆの推量してなり 諸

●其のなることあり 文

ひわらわらんあ候ことと異極をわらめ。物候

ひももく。もし聲もむとて使えはうく物

●醫師の詞

●祢代者に漢洋と書り不分明なる罪の内もわらふ智野

中ハ又ふもらんては傳へつる教り外しとあへだ

又仁和寺へ仰て親れた志考つる母を花と

しわわらふなまう。悲し先ども使役人も免

えびくろは極小。或志の云極はあまひ耳鼻

●母あゆのなびくもる又の中へはさる申すこと思ひし一し全

●耳鼻ハ切うなふとも命をたすれをよれなり 諸

しそきこさうひもも命はわらわらむといふさう

ん唯力とあそく。川舟とてまらぬ人とは

アゆふさうてみてうの故傷も昔もちらさうはむ

●肉と鼎とのるへしよれてなり 諸

●缺弊の穿ハわれ入るるかこ 文

るも川にさるふ。耳鼻ハけうけあづらぬま

よまら。あしう。命まう。まう。まう。まう。まう

さうり。幸の字節の字と書向。辛芳の義し又倍は命りくぐるもつひかこ 毒

一段之統論

●此段ハ座奠ノ過テハ必ズ失ノアルコトヲ記シテ左礼ヲ好ム者ノ戒トセリ 諸

ヲキテヲトヒテレカハ又失ナリ 此段ハ前段ニ仁和寺ノ僧ノ先達ヲ未メガル失ヲ云レラウ
テ又仁和寺ノ僧ノ先聖ノ戒法ヲ案ラヌカクゴトク酒宴遊戯ヲナシテ果ハウマシモ付又
所輪トナレルコトヲ云テ後人ヲイシメタリサレバ太甲ニモ天作災ハナラ 遊ベレ自ラナセル史ハノ
カレガタシトイヘリ今世ノ人加様ノ類ヒアルニジキコトニアラヌヨクツシムベシ 諸

御室

●凡ソ御室トバカリ

●仁和寺ハ上ノ殿はあ

首書有

イハバ仁和寺トモ越

手

御室小い。う。恩のあを

人ガタレ候寛平法皇御變

ヲオロシ玉ヒテ後ニ胎金ノ外ニ兩
部石ニ瀧頭ト云事弘法所傳
ニキ故ニ天台宗ニ傳ト思石
ケルニヤ又此敷ノ山ニ登リテ受戒
シ玉フ其跡ヲ御室トイヒテ譽
山ニアリレカレドモニノ御室ト
イハ上ノ段ヨリツツケテイヒクガ
タ九故ニ仁和寺ニ交スレ參

終る遊ハ法師

● 真正
論云

僧有五種一無耻僧謂毀形被法
眼者二痴半僧謂於三藏教不
達無難說用三明黨僧謂於遊
散管務闕謬善巧給攝此三種
多舍造非法業四世俗僧謂善果生
此通作法非法業五勝義僧謂四
果此定不害非法業云云

風流

● 遊仙窟ニ風流ト書
テオモシロトモ又ナカ
ケアリトモヨメリ 増録

コウニ

● 和名集ニ曰櫻子今
俗ニ櫻謂被子是也
以餉送又也野 ● 藻塩草ニ曰
後京極殿寄被子戀ト云題ニ
我ヲイトフ妹ガ心ヤコトト云
テガ千ナルワリゴナリ云古

双思

● 山城國葛城郡ニアリ
續千載集ノ大僧正禪
助歌ニコフリニ廿九年ヲカサテ
見ル哉双ノ思ノ秋ノ白雪又寛
平ノ御歌ニ 色々ニ並ノ思ノ初
紅葉秋ノ嵯峨野ノユキニ見ル白

その

● 未摘花ニエミ
ケテ猶聞ヘ給
ヘトウノカレ奉レトアリ句

コウト

● 源氏須磨ニイタウ
コウト玉ヒニナレハ花
鳥ニコウハ困字ナルベク冬ニ果也

紅糸と女

● 白氏文集ニ櫻
明焼酒ヲ燒

らとていそくさくひ出でて遊
ぶんとあそび法師をみる
終るあそび法師をみる

● 同く法師をみる
● 首書有
● 被子は被髪を著今云
年かかもの

あそびひく。風流のまじりやうみ
あそびひく。風流のまじりやうみ
あそびひく。風流のまじりやうみ

情のあそびあそびあそび
情のあそびあそびあそび
情のあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

● 酒の房
● 首書有

紅葉 石上 題詩 拂 綴 寄 詩

救珠

山案半黎曼陀羅呪經
曰梵語鉢塞莫梁曰

救珠此乃是引接下根牽課修
業之具也木槌子經曰昔有國
王名波流黎白佛言我國邊小頗
年疫癘殺貴民因我常不安法
藏深廣不得通行惟願垂示法
要佛言大王若欲滅煩惱當買木
槌子一百八箇常隨身念心轉南
無佛陀南無蓮華南無僧伽名乃
過于如是漸次乃至千萬能滿二
十萬遍身心不亂除諸曲捨命得
至炎摩天若滿百萬遍當降身
結業獲常樂果王言我當奉作
叔氏要覽二卷

下あといく

能譯名義集五曰陀羅推李
曰結印ヲ手也 參

いれく

大和物語ニ我
サノイトイラ
ナク成ニタルヲトアルハ表テ結
羅ナキ心ナリコモモノハツヤモ
ナクギコキナキ心ナリ念珠スリ
印結ビナト驗者ノアリサハスル
云ナリ ▲大鏡ニモ此史ブハサニ
ハサニテイラナクフルヒテ此ラ
トニタテツルトアリ

あゝる

定家ノ哥
ヨラバ只見ナレ
又草モナカリケリ 甲斐アハル
山ノタヨリニ 野

あゝる小真いん

古文直宝挾風辭ニ歡樂極公哀
情多 ▲同大宝箴ニモ樂不可
極欲不可縱トイリ
▲業平ノ歌ニヨカタニ月ヲモテレ
コレゾコノツモレバ人ノ老トナフ 諸

く云ハ酒ハさけハいのりれをいんあ

あゝる小真いん

密教ニ密加持の聖經ありといふ
ほゞ念のつらむされものん

あゝる小真いん
いんあ

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

あゝる小真いん

わいかに

桐壺ニアイナ
ウ目ヲソバメツ、
トアルヲ源語類聚ニ無間ト書又
レト河海ニ却テ無愛ノ字義
ヲ用ヒタリ句

一段之統論

此段前段ト同じ意ナリアマリニ真アラシ
トイヘルニウニテヨクキコルナリ人々
ル者能心得キ段ナリサテ此兩段ヲ能々味フニ當時仁和寺ニ学徳兼備シタル教化
ノ師モナキ故ニ僧徒等ノ式モ乱レテカ、ル事ヲモナスナリ前段ノ法師ヨリ此
段ノ法師ニハ罪甚多シ如何トナレバ支シ人ヲ百靈ノ長トスルハ信ノ徳ヲ子人ニユヘナリ
論語ニ人トシテ信ナクバ礼ヲ如何人トシテ信ナクバ樂ヲ如何トイヘリ又程々鸚鵡ハ能モ
ノイヘ信ナキユヘヲ以テ禽獸ヲナレトイヘリニ此法師等虚言ヲナレテ見テ謀キタフ
ラカス是信ニ背リ論語ニ老者ヲ安セン次者ヲ懐ケント孔子モ宣ヘリ况ヤ親氏ニ於テヲ
ヤ此罪一ツ此見ヲフ、ナカレ出スハ本男色ヲ思フガ故ニ果ハ是ヲ侵スベキタメナリ是邪婦
戒ヲ破ル其罪ニツ彼見ヲ盗ミ出ルハ是偷盜戒ヲ破ル其罪ニツ法師ノ身トシテ
淨寔遊真ヲ好ム是飲酒戒ヲ破ル其罪四ツ果ニハイサカイ腹立テ贖志ノ炎ヲ吹立
ルハ是殺生戒ヲ破ル其罪五ツサレバ大藏一覽ニ書ル酒ヲ吞テ隣ノ女ヲ盗ミ侵レテ其上
ニ隣ノ鶏ヲ殺レアラハレテ吟味ノ時虚言ヲ吐テ是ヲ報レトアルト同じ類ナリ僧俗ニ
ヨラズ此段ヲ能々熟讀シテイミレミツ、レムヘキモノナリ 説

必あいなするまのなり

空をともるるまのなり
切實のふよまのなり
以信の上の信と二信ふる心
かり常ふんにくべし 壽
い信の所寄りけりうと事人
さぬめにいお信と事なり

夜とひいと

詩格揚誠齋詩錄屋炎蒸不
可居高天爽氣亦全無 諸

天井

天將トハ井ツノノカ
タキヲマビテ空ニテ
クルナリ火災ヲフセグタメナリ
故ニ天井ト名付ク參

冬さむく焼く

問 菱ヲム子トスベレ此段ノ肝要
ニ然ルニ此詞前後相違歟答曰
大カタ菱ヲム子トスベレサレトモ天
井高キトテサノニ絳涼ノタヨリ
ナルベカラ子バ又冬モレカラ又様
ニスベトナリ 壽 山案天井ハヒキク
棟ハ高クスベレ菱ハスベレク又、
ハ煖ナルモノナリ

月たぬ

莊子曰知無用
而始可與言用

家バ造りやうの夜とひいと

ととく冬はいるるあふも
すまゐるあつさばあつさば
らぬぞるんまふゆりさ水ハ
凍しげかゝ清くて流るるこ
かふふととく細るる物成こ
ふ心をも戸ハ節のるらり色何
う天井のるるさむく冬さむく
かゝりし生作らぬるあふ

矣地非不廣且大也人之所用容
足耳然則則足而墊之致黃泉
人尚有用手惠子回無用莊百
然則無用之為用亦明矣

無用ノ用

ト云一アリ造作ニカギラス萬
事ニワタルベキナリ壽・影行録
實客不來則門戶俗ナリトナリ
又古文大室歳壯丸重於内之所居
不適當膝ナドイヘドモ又時トメ
ナレバナラヌホドニ無用ノ所ヲモ
作り置ベキナリ爰ヲ以テ見レ
大君ノ臣下ヲ召仕モ此心得肝要
ナリ無病ノ醫治リニ代ノ武士ハ民ノ奴ヨリヲトリトイヘドモナクテカチハサル者ナリ蓋嘗君
三千人ノ客ヲ愛ス其中ニ庭鳥ノ真似ヲスル者アリ常無益者ナレドモ秦函谷關ノ難ヲ
遊ル持ニ甚ダ益アリレカルトキハ人トシテ何ゾ捨ベキ者アラニヤ 説

一段之統論

同ニ手間ヲ入テ惡レクスニハ惡キナラカク書オカレ筆ノ跡ヲカキ情ニテヨリ侍レ貞

初て入るはら

隣ナク
ナレドモ

友モ久シク對面セヌウチニ何
様ニ學問ソトメテ井ノモシガレ
ハハ千思ヒテ心ツカヒスベキト
人ノ性ハ本善ナルモノナレバ昨日
ガ心アリレモ今日日弊ノ徒ニナルベキ
道理アリサレバ程ヘテアヒタル
人ニ心置ベキ事ナリ句
十年向癡セザレハ明師ニ逢
カトトイトイヘル本語ニモカナテ
ルトナリ 參

第一節

人ト交ニ物語スルノタレナミヲ云フ前ニモ朝夕出逢ナカニモトモアルトキハ心ヲオキ

此作つてはるるもやうし
● ぬれは母屋書院かどか外の用かた不と云流又うぬ
のな浦く番くまつてひす室比と砂比と

くも乃用ふしてまらうと

ぞ人のさああひゆ

● 用ふあはるる ● 善好財分の人の物くわらうと
● ハモ用のか 一皮の緒ゆとまらうかひく云か
● 六月ひぐー 藤子のあもあふべし 狂おとま
● ぬれくゆり といえらるるいんかあうらうら
● ぬれあははど 盤 ● 山案重云の括りくー
此の用の中もあはらるるも面白く

● 此段家作ノ心バヘテ教ヘタリ前ニツキハレクアラニホシキコソ奥ア
ル物トイトイヘル段ノタケヒナリ ● 衣食住ノ三ハ人間ノ大事ナルニ
同ニ手間ヲ入テ惡レクスニハ惡キナラカク書オカレ筆ノ跡ヲカキ情ニテヨリ侍レ貞

久しく居るはら

己人の我方小あつる事

● 化のまへうとをまへて我方のことむらうら
● のこらうらうらとくはくはく

こ小あつるはら

もあひかたれへぞそれか

● せをせとまをまきり ● せをせぬの被利 諸

とわゆる人も初く入るはら

くわらぬら

● 久しく中絶してあひかた
● ひあどんやとこまふと
● ぬれあはらうら
● ぬれあはらうら

● 久シクヘダリテト云ヨリハツカレカラ又カハト云ニテ
此段四節二分千見ルベシ文段是ニ同シ ● 山案此節ハ

引ツクロヘトイヘリ花ヤスレク隣リテ後ニ逢時ハ愈心ヲ付テタシムベキ事ニ

息もつゝあはれ二条院讃岐ノ哥ニ云々浪間カキワケテカツクアノ
息モツギアヘズ物ヲコソ思ヘ野

あはれ人の

善悪對テ
書ニ論語

ニ君子小人ノ事ヲナラベテ解
セラレヌルト同ジ筆法ナリ佛
書ニモ對教ノ心ナルベシ盤
子經ニ大辨如辯トイヘリ又禮記
守口如瓶トモイヘリ初段ニモ
言葉ヲホカラヌコソアカズムカハ
ニホレケレトイヘリ當時ハ詞多
ニロニニカセテアルコトナキコト云
ヒチラスモノヲ辨舌者ト云ウ
君子ハ却テコレヲ愚ム言多ケ
レバシナスクナレトモイヘリ説

らうづり

源氏夕貞ニ
ラウガハレキ

大路ニタチラハレテトアリ

れ中ふらうらあはれんるの極は落りあせ
● 落中啓ケリ説 ● 是と云ふらうらあはれんるの極は落りあせ
● 初まうらうらあはれんるの極は落りあせ

第二節

● 此節心ヲ著テ玩味スベキモノナリサレバヨカラヌ又人ハ我見タヤウニ出レテ興ノアラシトラ催
セリコレ皆心ニ人ノ喜ヲモトムル故ナリ論語ニ巧言令色鮮哉仁トアリ説 ● 此節ヨカラヌ今云
ヨリラウガハレト云ミテラ曲禮ノ傳言スルナカレ勸説スルナカレ雷桐スルナカレトイヘル所ヲ
モキテ見ルベシ野

い

古今忠房ノ歌ニ
モキリグス

タクチ鳴ノ秋ノ夜ノナガキ思ハ
我ノミサレル句

● 甚の字ハナキ付不句也
● 名あつ人ハあまき興ヤウ
てらうらあはれんる

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

● 一と云ふ下なる人諸 暫の字又句也とも書 假油の字ノ野

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

あはれんるの極は落りあせ

君ふはく

惠遠法師 時ヨリ 洪門ハ

不被王者不拜父母ナドイヘル事ハ
云出せリ又棄恩入無為真實報恩
者トイニ子出家九族登天ナド
云論又下リ野

心ハ縁小引也

本生心 觀經白

心如流水念念生滅於前後世不暫
住故心如大風一剎那間歷方聚故
心如猿猴遊五欲樹故心如飛蛾愛
燈色故心如野鹿逐假声故心隨萬
境轉々所實能幽野 ●智朗禪師
ノ語ニモ心ハ住所ニ依テ清カレ

レトモイヘリ又惠信僧都ノ年ニ
村ノ下ヲ住家トスレバラゾカラ
花見ル人ト成ニケルカナ 説

若者傳説 圓覺經曰 欲求如來 淨圓覺心 至 冥坐禪室 圭峯 臨曰 身住則心安 心安則境寂

若菩提場 晝夜常 修於妙道

若者傳説 圓覺經曰 欲求如來 淨圓覺心 至 冥坐禪室 圭峯 臨曰 身住則心安 心安則境寂
參 ●法花經序品曰 入深山 思惟 佛道 同於便品曰 我常 獨處 山林 樹下 若坐 若行 又藥草 喻
山曰 他處 山林 常行 禪定 伊勢物語ニ 齋宮ノ歌ニ カムクトテ 雲ニ ハラヌモノナレド 世ノウキソヨソ
ニレテア ●富麻中將 經緣記ニ 曰コトリノミ 深山ノ 影ヲ スミヨケレ 草木ガ人ノウヘライハ子ハ 説

第二節

心ウスキ故ナリ世ヲ離レテレツカナラテハ 修行シガタキ物ヲトサテ心ハ縁ニヒカレテウツルモノナレバ
君ニツカフレバ其縁ニヒカレテ國ヲ治ルロガ忠 第ノ心ノミヲコリ家ヲ見ヘリ見レバ其縁ニヒカレテ妻ヲ
養ヒ生業ヲイトナム心ノモニテ後世ノ心ハカマハラニナルベケレバタ 閑居ナラテハ 佛道 修行ハトゲガ
タレトナリ 興ニモ縁ヲ離テ身ヲレツカニシトイヘルタグヒナルベシ 山案此節ハ上ノ節ノ末ノ句
ヲウケテテ道ヲ修行スルニハ必ス処ヲ扱ムベキコトヲイヘリ 此意儒書ニ 數多見ヘタリ 論語曰 里ニ為
善 擇而不居 仁焉得智 又曰 賢者 辟世 其次 辟地 其次 辟色 其次 辟言 又曰 韓退之 詞ニモ士
之行道者 不得於朝 則山林而已矣 山林之士之所 獨善自養 而不憂天下者 之所能安也 如有憂天下
之心 則不能矣 又梁棟傳ニモ 閑居可以養志トイヘリ

ふいふの

論語ニ 管仲之器

さうつふいふのまうく人及

むげ 山林よへくも 誠とむさけ 荒とむさぐよ

根の今の 毛よりトハかど

荒とむさぐとよと 啓蒙の義よりんくうらび

心不生不滅のさうり此門よりんくうらびと

小何の真のまうての物と云ふ

翻子眷属 小何の字まの物にのまの字

はへ家とくりかるとかみ

いさゆかんとあや家よひ

毛糸にあらんまうり

人のまうりぬらふ世

りてうらる物されと云ふ

らてはるはらぬと云ふ

先づ我身と世の俗とを離れ徳と放下して

頁書有

頁書有

頁書有

頁書有

世の人の度量 於のわく人の河に流
ハ佛立世の河に流漢などの流にハ
とよむるこのころなり

荒とせく

二休歌
三引ステ

世ハナキモノト思ヘトモ雪ノフル
夜ハサムクエノア

そじろつひあ

袿宏
竹窓

二筆曰人初出家雖志有大小莫
不具一段好心久之又為因縁右
利所深遂復營官室飾衣服置
甲産畜徒衆多積金帛勤作一家
縁與俗無異云古謂必須重離
煩惱之家再離煩惱之綱是出
家以後之出家也出前之家易出
後之家難予為此曉夜惶悚

さいらり

袂衣ニサカリノ物
ナジカハルシト思ヒサ

ラハントアリ

貪欲

法花經諸苦所同貪欲
為本若滅貪欲無所依
此論論曰於諸境界深起執着
名貪諸煩惱中貪為最勝野

紙の被

山寮身章撮要釋
曰被寝衣也大被
曰衾單被曰稠世人或以錦繡或
以希素或以楮皮為之取其暖且
適也紙被詩曰紙被圍果度
雪天白於紙被軟如綿此外劉
子鞏呂居仁等カ紙被ノ詩アリ

麻の衣

僧靈徹詩年老心閑
無外事麻衣草座

亦容身ヲ向

あつとせくいさゆひあ人の貪欲かほさふ似
あへくさび紙の被麻の衣一神のゆうけ

あつとせくいさゆひあ

首書有

首書有

三衣一神と

たよりあり

紙の被小カクズ一神のゆうけ
一神のゆうけ紙の被のあつとせくいさゆひあ
一荒とせくいさゆひあ人の河に流漢などの流にハ
とよむるこのころなり

首書有

首書有

あつとせくいさゆひあ人の貪欲かほさふ似
あへくさび紙の被麻の衣一神のゆうけ
あつとせくいさゆひあ人の貪欲かほさふ似
あへくさび紙の被麻の衣一神のゆうけ

野ノ小淵冬足の...
とてか...
あつて...
心も...
べい参

一評

秋氏要覽曰梵曰鉢鉢多羅
此曰應器今器曰鉢又呼

鉢孟即華梵兼名也鉢者乃是三
根人貧身要急之物佛聽用ニ
種又有一尾鉢有鐵鉢
佛祖統紀有嚴傳畜鉢無長物
躬拾薪汲水参僧可士詩一鉢
即生涯隨緣度歲華句

事大類聚前集僧問守清禪師如
何是知尚家風曰一鉢兼一鉢到所是天真

藜のあつもの

莊子曰孔子厄于陳蔡藜藿不糝句
菜▲護法論曰其心於幽深閑寂之處藜藿糝草布僅免飢寒

人のほの人よかき

護法論曰秋氏雖衆而各止一身一粥
一飯神破遮寒而其所費亦寡参
范堯夫市衣銘曰藜藿之糝緇布之温名教之樂德義之尊表之孔
駟野之常安参方丈記曰藤衣麻ノフスマウルニシタガヒ

やましくいふわへい

テハダヘヲカクレ野辺ノツバナ翠ノコノ三命ヲツクバカリナリ人ニミジハラサレハ姿ヲ耻
悔モナレカテトモシケレバヨロソカナレトモ猶味ヒラエシクヌヌ文

第三節

其ウツハモト云ヨリハヤク足ヌベレト云ニテ一此第
三節ハ彼後世子カフ人ノ家ヲハナレガタクスルハ身ノ
アヒカキリハ衣食トイフ物ナクテカナハザル故ナリ然トモ世ヲイトヒタル人ノ衣食ハモトメヤス
ク心ニモタリヤスケレバヌ世ヲハナレテ關ニ修行セヨトノ心ナリ文

わらふとらる

六道講義
曰我等通

わらふとらるるをさうあはれ
とらるるはとらるるもわらふ
世とらるる人なれどもと
推後世のわらふとらるる

剃頭不剃心深衣不深心乃空可
耻々々可悲々々参慈鎮和尚

ノ歌ニ何故ニステケル身ソト拈
々ハ姿ニハ千ヨ墨塗ノ袖増鉄

人

人ハモト天理ノ公ヲウクト儒ニハ
イニ佛道ニハ五戒ノ因ニテ生ラ
ウケ得タリト云ナリ参

世にわらふとらるるを思ふはとらるる
彼能くはいれて世のものもわらふとらるる
かく参上の存ふわらうてのわらふとらるる人の
御の腹もわらうてのわらふとらるる

ふいらのわらうとらるるを思ふはとらるる
あつとらるるを思ふはとらるる

あつとらるるを思ふはとらるる
あつとらるるを思ふはとらるる

菩提

菩提ハ梵語ナリ羅什ノ
弟子肇公ノ在言通之
極者終日菩提トイリ故ニ諸師道
ト龍シタリ天台大師ハ菩提ヲ智惠
ト見ルトモ注シ給ヘリ毒

高教より

涅槃經第十六曰
善男子一切男女
若異四法則名丈夫何等為四一
善知識ニ能聽法ニ思惟義四
加説修行云云無此四法則不得
名為丈夫也何以故身雖丈夫行
同畜生盤●萬善同歸集曰無聞
無智慧是名人身牛ト參

第四節

段ヲ終シタリ文●山案此節ハ上ノ節々々ヲ終テレカモ畜類ノ一向テキビレク人面獸心ノ族ヲイマ
モヲトレルナルベシサテ此結句ヲ難スル説アリ其難ヲハ新註ト云抄ニ答ヘタリ曰或儒ツ
レリテ曰野掩兼好カ云処ノ道ハ何事ヲ指ヤ君臣父子夫婦兄弟朋友ノ外ニ道アラズ兼好
ハ世俗ヲ畜類トスレド儒者ヨリ見レバカノ世ヲノカレテ人倫ヲミダル者ヲ畜類トスト記世

リ是儒業者流ノ言ニシテ天下ノ公論ニ非ズ私ヲハナレテイハ免人道アリ老莊ノ道ア
リ釈迦達磨ノ道アリタトハ儒教老ノ三水火土ノゴトシ天下ニナクテハアルベカラズ國ニヨリ
時ニシテカニ盛ナルト衰ルトノタガヒ侍リ今時大唐日本ニ佛法サカニ行レ其次ニ儒道
ナリ惜哉老氏ノ道ノヲト只タルヤサレド又時ヲ得タラバオコラシトモシリ難シ在
來老氏ヨリハ仁義ヲ懸シ教氏ノ儒ヲ誹謗シ儒者ノ老佛ヲ異端ナリトテ攘斥スルメ
ツラレキ事ニ非ズイカニゾ彼儒ノミナランヤトイヘリ此辨一マツトニ兼好ノ二道ニ偏ナラ
サル志ニハヨクカナハシモノナリ

一段之統論

此段ハ道心ヲス、ミテ道心アラバ世ヲ離テ身ヲ閑ニセヨト教
タリ例ノツレぐラ本意トスル心ナルベシ文●此段世ヲ遊レテコソ
道ハ求ヤスケレレカラガレハ畜類ニコトナラズトイハル兼好ガ心佛道ニラ井テハサモ有ナ
シ若或ハ真俗不ニト云世間常性トイヒテ大乘ノ道ハ善ヲモトラス惡ヲモステス色采ニシテ
空ハ水ナリ煩惱ハレアカキニシテ菩提ハ熱帯ナレバイツレモ皆本來一躰ナリト思フ故ニ三毒イヨク増
長シテマナメリ魔道ニ入是等ノ人ハ兼好ガ罪人ナリ編ノ秀サルハ口口ノ孰ニスルニシカズ大
乗ヲホレイ一ニスルバカヘリテ小乗ノ殘勝ナルニシカズ野●此段ハ道心者ノイテ俗家ヨリ
オシハカリ思ヒクダスヲオサヘテ書ルナリ又下ノ六段目ニ道心者ノカヨリ在家ノ望アル
フ我身ノ輕キ一ニ事ヨセテソレリアナドルヲ僻事ニ論ジタリ誠ニ心得ベキ教ナリ全

大なり

法華方便品世尊以
大事因縁故出現於
世野●行成郷歌ニ世ノ中ニ
出トイテス佛ヲバタニコトノ

大なりと思ひぬらん人かさ

弘法一七ハ生死のニツ
と大なりと思ひぬらん人かさ

そあはぬかしくなひひとくよ
じきかふる事をつとゆるく

善哉おねむむむむむむむむ

乃ばの高教よりのある

あはんと生るるんるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

あはんと生るるるるるるるる

タメトシラナン 縁

捨へさく

往生十因日依於中

縁不退大事

かきくろふよくらんまのな

ささとげとてとれがさるべからむ

かきととげぬるもそれさるべからむとてなり 諸

第一節

大事ト云ヨリスツキナリニテナリ此段四節ニ分ツ文
段コレニ同じ 此節八前段ヲウケテ道心アラバ住所

ニモヨラジトイフ人ニイヨク深クイシメタリ也 此節ハ一段ノ大意ヲ釋スリニコトニ大
事ヲ心ガケン人ハ必ズ小事ニハ心カクベカラズタトヒツトメカマリシ事アリトモ
半途ニシテスツキシテゾバ生死事大ノスミヤカナルニカハルアランヤ 山案

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

まのり憐れとありみ細といふ 世にほととを果してとけてあり 全

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

善哉んといふ 田中紀ふまくと善哉んといふのいふとま又善哉んといふ

かきんんぬ かしこくといふ善哉なり 善人の善哉の後ふらう 説 それくのいふと

かきんんぬ かしこくといふ善哉なり 善人の善哉の後ふらう 説 それくのいふと

と云 全 山案は説教をとりおくれこれといふまふん

かくあつて先づもくもくもあれたと

と云 一の合てするものとらちあけて

の末の資糧の多くをさるるものと

ぬれりて癸心もべり

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

あぢらびるやをて同くハ彼事ゆは

第二節

アリサニラ書テサマウニシテハ大事ハ思ヒ立ガタキ一ライフ之文。此節ハ上ノ節ノ萬ラ
スツベキトアルヲウケテイヨク其意ヲ云々タメニ先此節ニハステガル者ノ終ニ蓋ナキ
一ライヘリサレバ生死ノ大事ヲ思ハ世間小事ニ必以カハルベカラズタトハ初ニ菩提心ヲ
有テモハヤ世事ヲサステ子バ後ニ其志ヲ取失ナク佛者ノ臨終ヲ不待シテ木火ノ
定ニ入ルモ初ニ菩提心ノ堅固ナル内ニ命ヲ終リ度トノコトノ歌ニモアリトモヨシトモサラニ
云カタレヨコクカワル人ノ意ハトアリ又始メアラスト云コトナシ其終ヲヨクスル一ナレトイヘレ
バ思ヒ立ト其儘餘夏ラバスツベキニ金葉集ニ「明月一テト思フ心ハアタ櫻夜ノ間ニ風ハ吹又モ
ノカハ又未之公ノ勸学文ニモ勿謂今日不学シテ有來日トアリ説

わづら

飛川百首ノ
歌三師頼

ハカテカラ思ヒシラスハナケド
モエテ、レニノミ月ヲクラスカチ此
詞ニテ書リ又

てぞ一初いすぐめ

第三節

大ヤウト云ヨリスグメルニテナリ。第三節ハ道心ハ有ナ
カラ猶世ニカ、ツラフ人ライ、レメタリ又。此節ハ上

大ヤウト云ヨリスグメルニテナリ。第三節ハ道心ハ有ナ
カラ猶世ニカ、ツラフ人ライ、レメタリ又。此節ハ上

大ヤウト云ヨリスグメルニテナリ。第三節ハ道心ハ有ナ
カラ猶世ニカ、ツラフ人ライ、レメタリ又。此節ハ上

ノ節ヲ承テ惣テ加様ノ人三人ツミナラズ世ニ多アルト云テ世人ノ無常ヲ觀念セサ
ル事ライキドホリテ云ナリサレバ後鳥羽院ノ御製ニ「ステヤラ又浮身ノ果ノカテレサラナ
ゲキナカラモ猶過スナリ又金葉集ニ二品親王ノ歌ニ「世ヲスツル心ハナラフゾナカリケリウキ
ヲウキトハ思ヒレドモナド、ヨメリ良ニステ難キハウキ世ナリサハイハト善ニハス、ミ思ヲ
バイトラ志ハアルベナレバ彼心モナクテ放逸ニ月ヲ擧ス者ヨリハ大キニサレナリ 山案

物語ニ重衡ノ乳母ヲナカト云女重
師ノ生捕レ玉ヲ見捨テニゲナリ
一テラ載ス又智盛ハ武功ノ猛將ナ
リカドモ子息武藏守知章ノ親
命ニ代テ死シ至フヲ見ナラ落行
給テ宗盛ニ向テ宣フハ命ハ惜キ
モノナリ我子ノ討ルヲモ見捨テマ
ノタリ上落涙シ玉ハリトアリ 説

財も捨

香休浄
土文巻第

二曰且若人有百斤之金雖有不能
負以行必捨而去之若抱金而與
之俱死世心謂之太愚是皆知此身重

近き火がぶるよぐん人々
あぢらもやいふおんあひ

あんとよきさだ。恥ともふ
らびあうともとくわん

和やなううわめまういふられん説

於百介之金也 此語亦見於...

人と約抱う 陶淵明雜詩曰 歲月不待人

水火のまじる 曰衆生生死 禪家龜鑑

甚於水火也 萬善同歸曰水火所 避心求救 遺教經曰無 常之火燒諸世間 梵網經菩薩戒 律曰人命無常過於山水今日雖 存明希難保 性生要集曰若 覺無常過於暴水猛風掣電山海 空市無逃避處如是觀之心大怖異 厭妄帝食不至哺如救頭燃以未出要

とそらん 華嚴經卷四十 普賢行願品

至臨命終時 寂後刹那一切諸根 悉皆散壞一切威勢悉皆退失轉 相大臣官殿内外象馬車乘珍寶 伏藏無後相隨 悲華經云妻子 珍室及王位臨命終時不隨者

すそらんや 世あ人の世あふりて世とめられぬる事ハ心と

第四節

事速ナレ油断ナク大事ヲ思ヒタテトス、メテ一段ヲ遊シタリヲ

一段之統論

ユメクカハリ見ベカラスコレモシニ被モレハテト見合セハ一時ノ懈怠ニ生ノ懈怠ニナルノ ヲクク心得ベキナリ 此段ヲ見レバ片時モウキ世ニ足ラフミトメン心地セラレ侍ラス彼野 槌ニイハ花山院ノ帝悲華經ノ寶子珍室及王位臨命終時不隨者トイヘルヲ御覽レテ十 九ニレテ出家セサセ玉ハタラシ誰モアルヘキナリ去若キ人ナドハ行末ヲ思ヒハカラヒテ 思ヒ立ベキニ彼花山院モ後ニ八道心亂シサセ給テ御後悔ノ由衆花物語ニ見ヘリ

志業院ノ遺教傳 山室より仁の院

何んぞれこの智恵ありけり いもろしと云

まのまのこころにてかへくらむ 後着代燈

いもろし 宗の義と解と云

さるそらん 命ハ人成ゆ色

のらい 事ハ水

火のまじる 人の命此終るるいま人の世事と悟らんとしとくま

火のまじる 火のまじる 近き火をいふとくま のるべし いれ 後悔とくま 命終るる 命終るる 命終るる

火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる

火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる

火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる

火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる

火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる

火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる 火のまじる

時うつりせりのれを必りくらり夢ひあふもりてませふつらり
くらり物おもくふゆのまよとてまよひもともてまよひは深成物倍よは筆法は白

療治

療或作藥説文流也

病といわ

雖知昔辭

道三が編せし宜禁本草ヲヨミ侍リ羊頭ハ辛ク平ニシテ部アルモノニテ病ヲイハスホド能ハ見ハルニ此僧ノ腹中ニヨク相應セルニヤ 参

三万疋

或説ニ云本朝ニ鐵平文ヲ一疋ト云フハ龍ハ

駿足錢上ノ駒ヲエリ付タル錢ヲ十文ツノノサカイメノハダテニ入テツギレナリ後ノ代九十六疋ヲ百文ニサダメレヨリ此事ススレ侍リ十文ヲ一疋トイフモ駒疋ノ錢ヨリハジレリトナリ 奉

しりあふら

此僧都ノミニ非ズ晋ノ陶淵明顯延之カ錢二十万ヲクリタレハ即酒家ニ送テ酒ヲトリテ飲タルカカル事アレキ夏ナラハ淵明カコトモ南史ニモノセズ歐陽修モ詩ニ作ルニシキガイサギヨキ夏ナレバゴソム侍(タル)錢ナドノ重宝ナル我まシキ物ヲ未テ志ヲヤレナク致ナリ此ヲ當時ノ人ハ錢ヲ持テサハ居レバヨキコトと思ヒテ用立故ラシラス左様ノ世ノ習ヒニナリニケル故ニ淵明ヤ僧都ノ元マヒラ不審ナルコトノ様ニ思フコトノ錢ノ錢タルヲ知名故ニ僧都ハ半ヲ買テクヒテ錢ノ徳ヲ得タルナリ 蓋

どろり

ハ食の字 今ハ上人の詞はもちゆらん説

持説大勢巻六

光そそ大ぬ神ふうつあうく
膝下ふまははらひあう
ら文をもよこさうねるあふ
七日ニ七日ちど瘡治とら
あまわめくあふ極よあは
いもぐらとえらひく神ふ
かひくさひくあは病とい
やうきり人ふくいとあふ
百書有

我ましくしつと振まふ

なり只獨のそぞらひくあう
あそあうらあふ肺近
死ふさあふ法二百貫と病い
とあそあうらあふと病
と百貫ふうりて皮是こふ
疋と羊次のあうとこあう
糸あふ人よあうと十貫つ
ああう羊魁とこりあう

百書有

我と得是こふと

百書有

てまゝ何〜まゝはあふまゝの三百巻の筋は
ほ〜まゝあふまゝうけてかくと〜いふ筋は
を維〜なる志をかゝりけるいづれ或
三百巻代むと〜いふ筋は判りし傍の便の〜と書し説
法師と見え〜白うありと〜ふあ〜と付〜りま

山業は後緒く号説多〜先文版抄云なくさき若小真徳曰は段は此世語の三ヶ
此大業一ヶ案こもりてありと〜取ひ取しと書す予いそふ先と安けりいふこと
つか白うありの義ゆていなり〜一版が大事なりむり〜いふははきく草ま
いあうありの義ゆていなり〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
くもとあるは〜或説はあうありと〜白うありと書すれと向の字と不ぬる
とよむ白うありと書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
の姿はなわてさすれ〜人としと書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
とりとあり〜詞とありと〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
は我もあ〜と〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
あると〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す

都もあ〜と〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
わつと〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
もお遠〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
ある〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
又一義は云深段の書意の大事なれ〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
大なり〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
ある〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
と〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
は〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
説〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
る〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
さて〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
ト〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
め〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
か〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
ひ〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
て〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
や〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す
何〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す〜と書す

山業は後緒く号説多

三百巻代むと〜

非時食といふは、しりは是こ又中ぶ食といふは、こも細八仏の弟子は、留
庵夷とせしぐ檀越のあふしり暮食とて、一時主人あ小何くは、
及くま家あ若せり、主人あてこれとんといふは、かきくは、人仏
みまて、いあ、これ城人あんと、いこ、て、
世、これ、あ、い、は、て、
これ、非時食と、
ハ、おと、
あ、
あ、

時を人よひて、定て、
ありふも、
こ、
あ、
あ、
あ、

乃い、

世、
世、
世、
世、

一段之統論

此段ハ上天事ヲ思ヒ、
事ヲイヒタルヲウケテ、
ワケモノナキ人ナド、
常ニテハナシヨカラヌ、
智者ニテシレル故ナリ、
テリヤアラント、
ヲ思ヒタナタルコトハ、

和名集



名、
名、
名、

切韻、
物語第二云、

あ、
あ、

徒然大納言

棟ヨリ醜ヲ轉カス事有ケリ
皇太子御誕生ニ南へ落レ皇女誕
生ニ北へヲスラ是北へ落レキ
ケレハ急ギトリ上ヲトレテラシ
ケレトモ猶アレキ御事ニ入申ル野
胞衣 神代卷及全産時悉ク
淡路磯島野

まうらひ
ソレニシテトモ
ハサハシトド
モ皆實義モナキ一多レ正月二野
老ヲ用ル老ノ字ヲイハレ海
ハヨク字ヲナリ或ハ種子ヲ奉
甚ノ義ニカヨハ世昆布ヲヨコ
心トイフタク見自三十三ナレニ奴
リ 参

とほむけまか
な系ハラ
た系ハラ
た系ハラ

又皇太子にもうらひと
こゆよりかこれらと
つる子のあつかり 参

胞衣とてこむる内り也

首書有

かひりとりとてせし海

は不殺後あり先ニ義ニ
さるる物ありお生れ
て形の子生まてし
福も其内であら
おしとハ胞衣と
まむあり 参

あしとこれとてま
ふかう又の子と
ふふとこのむら
わは胞衣とて
首書有

た系ハラ
た系ハラ
た系ハラ

又皇太子にもうらひと
こゆよりかこれらと
つる子のあつかり 参

た系ハラ
た系ハラ
た系ハラ

又皇太子にもうらひと
こゆよりかこれらと
つる子のあつかり 参

た系ハラ
た系ハラ
た系ハラ

一段之統論

此段ハレス事ヲラセテ世
レテ書リ説 此段ハ詩ニ
エニ 参

ガフ故ニ朱子列女傳ノ
宝藏ノ繪ヲ引テ考ヘ合
セラル寶モトク覺ユル
野 後ヲ城院ノ御女
リ 参

延政門院

今代後醍醐院
皇女御母大納言

延政門院
甲
乙

甲
乙

とほむけまか
な系ハラ
た系ハラ

徒然大納言

三十八

